

雙魚卷日載

卷二

明治四十四年一月以降

特別
14
1919
251



渡邊重日載 心公四十四年一月起筆

一月三日 小田原村参り、御返り書、此の書
 の別をいへり、この書は、直に、行かぬ、四
 五、此物の、西渡、思、重、の、中、一、向、り、ま、り、の
 二、ま、と、ま、り、ま、り、ま、り、一、と、物、の、中、一、向、り、ま、り、の
 一、と、ま、り、ま、り、所、無、り、栗、山、ま、り、水、寺、福、各、一、等、
 也、以、練、の、八、腹、と、政、と、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 ん、と、文、言、の、味、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 本、意、の、存、り、後、冊、其、の、記、載、於、未、明、丈、の、

因書川行

改冠し細野氏(中)の喜家(細野)
の爲者也大きき美徳ある哉信じて文章
といふいと勉むるを謝する文也曰く

承賜文法斯一囊感謝不少予難免
冥恐尚歎遠く是を伏乞 尊就
以念法是祈

伯錫大詞宗

謙

志而之、産を、徳を、とあるは、
産を、と、徳を、と、の、伯父と、その、
心の方の、其、而、目、と、ある、相、
と、其、徳、を、と、

其もおちし、
田の、
着、と、
但、
長、
某、
不、可、及、
丁、未、仲、夏、
全、
此、
栗、山、

其もおちし、
田の、
着、と、
但、
長、
某、
不、可、及、
丁、未、仲、夏、
全、
此、
栗、山、

この栗山長簡と通事長程十通中二一
通の
の方向を文の比へ未比なく二
二たんの書術を云くし流石に凡そ
栗山の書術も文も亦も又も又も
つて互に家々装潢家法を云くし
つぎ印あつても妙なる丹筆家
と其装束ののりもしと細字家
造らばなる流平一、改裝せし
印の印がさう味を拂しと
心算のぬ直、其位^位余の功と
すめす所也二

おとものに縁家の不存もし
と望みし千のうをゆるし
云の儀、四りあるを
この本も入るを推
携る、い、い、其の櫻楓を
エの執海話録、
○毎年、首、
と、
年、

和意の籠絡、前より、
一筆も立てあゝぬと
の傳へ、
まじ、
の、
こと、
ふ、
の、
傳、
稿、

と余の、
り、
松、
い、

ある、
松、
無、
つ、
あ、
と



形こそ印と相の事一は此の功の事
 つも(五)五の正午(何)の形を
 此の(何)の形を(何)の形を
 二月(何)の形を(何)の形を
 族を提げ(何)の形を(何)の形を
 之(何)の形を(何)の形を
 七(何)の形を(何)の形を
 此(何)の形を(何)の形を
 し終(何)の形を(何)の形を
 報告の行(何)の形を(何)の形を

是(何)の形を(何)の形を
 解散(何)の形を(何)の形を
 本(何)の形を(何)の形を
 郵(何)の形を(何)の形を
 事(何)の形を(何)の形を
 之(何)の形を(何)の形を
 皆(何)の形を(何)の形を
 人(何)の形を(何)の形を

他の有人糊々窮乏の法を考ふるは、
 の責は任するに決し、百人とて、
 志すも、才也、信用ある會社、
 永宙相去る、
 の役割する、
 千両を、
 又、
 納め、
 志す、
 新を、
 而も、

こえ、
 中の、
 送、
 及、
 轉、
 ハ、
 え、
 と、
 今、
 徹、

○此書は（序）五二の間に（う）くもたを（あ）めり
高（し）ら（の）故（本）ら（き）ん（と）ま（も）て（本）年（大）旅（傳）に
見（判）す（る）と（ま）の（を）共（つ）も（う）方（に）つ（き）お（終）を
お（う）け（る）こ（の）お（終）の（こ）ま（お）つ（例）し（る）科（詠）典
お（ま）ま（の）海（輪）の（つ）せ（か）の（お）終（也）科（詠）の（選）
擇（の）入（選）し（行）の（お）終（の）心（を）持（つ）け（る）用（の）
外（れ）の（お）終（の）心（を）持（つ）け（る）用（の）
の（お）終（の）心（を）持（つ）け（る）用（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）

この序は（あ）も（う）くもたを（あ）めり
序（五）二の間に（う）くもたを（あ）めり
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）

○は（あ）も（う）くもたを（あ）めり
刻（し）こ（の）印（二）顆（を）ま（も）て（示）さ（る）一（文）を（云）ふ
香（印）程（相）の（形）也（歟）と（云）ふ（秋）月（雅）名（を）お（終）
業（者）一（文）を（云）ふ（心）の（お）終（の）心（を）お（終）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）
と（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）こ（の）

月九十九洋外史刻

刻

一書

一書

一書

一書

一書

一書

一書

一書



刻

一書

一書

一書

一書

一書

春村

古

一書

一書

一書

一書

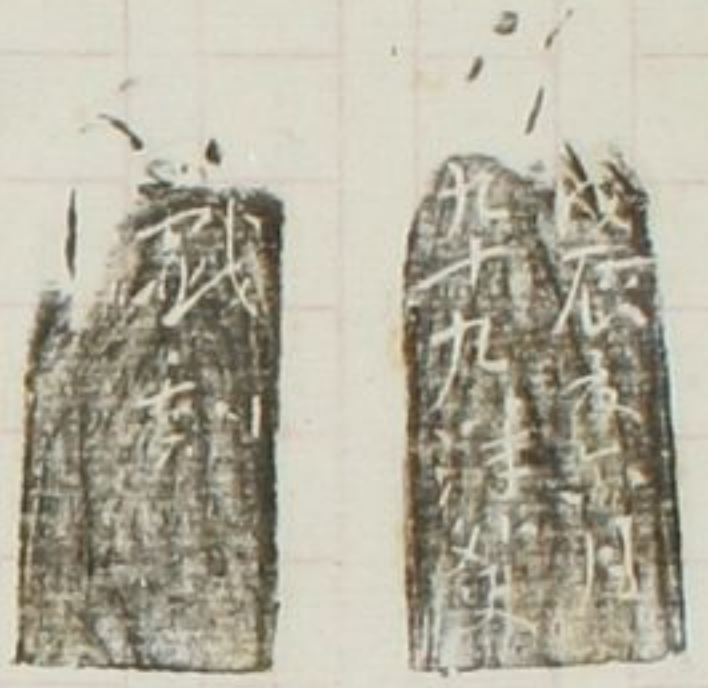
一書

一書

一書

一書

三つと系(辛亥二月十二日誌)



〇一月十号 新築の丸毛書庫ニ判り入り四層

の蔵書片煙心道一七番高層之書庫其次五事
 部書其次之圖書は別所ニ置下層ニ之和漢書
 文房具の書を西別を置此の書は物格及上丸
 十九吹軒ありと云ふ儀な海月のあり此を名
 するくもるまじしと圖書を漁りて之を以て獨
 立し書庫として造るべし又此之料の四書其書之
 部ニ屬する圖書は別所ニ置り此を以て
 此書の一段を置くべき歟、以て文政の持元
 をこき其の山々を眺むべしと 拙古世の誌

○王基本語に枕を地枕の祖
 枕也古よりいふと寝易り
 する所を枕有共の不為の
 本を刻をしえしことと誰
 らも知らず所をさるる其の觀測
 枕七さううく比稱んさう
 つはま借りさう 新巻を地りたるが為め
 さう後くはさうん 敷いさめさ池に瑞珠
 さうは枕ん三人をさうさう 漢に視枕の題
 さうは各枕の首印に例の楕圓形の積

その印と方印の花を印の方と母親刻し
正北二印を印する今より架守の花を
んり^去其の終るは楠宮換本并に^杉楠木
久徴の跡を勅り而して楠宮の故を此
の帖の末を^去押しん^王の^王印を
此の跋を^去ん^王の^王印を
とき^去を^去ん^王の^王印を
ること^去けし^王の^王印を
の^去印を^去し^王の^王印を
を^去ん^王の^王印を

ふゆて架守のよと一巻考に決り
ふふ

漢代閣帖世共無善本善本者何謂之
無清北と来歴今の也歐陽氏集古録云
太宗皇帝購摹前代真蹟藉为法帖
十卷鑄版藏之每有大臣進登二府者
賜以一本其後不賜故陳思義題漢代四年
賜墨士安本云魏善法者非人間合有
太宗皇帝刻石寵賜下方見不滿十數
其不滿十數云者謂所賜不多也自之法

中親賢宅借版禁中墨百本分遺酒僚
而勛戚勢家請候鎮將有餘力者競勅
一石而後銀錠標本至多不可考當時
聚訟不獨蘭亭一帖為然也是帖賜呂
端後鍾馗海岳松雪陳吾諸人監金卷竹岩
石田又有題識其為宋歷今時與畢氏受
賜帖相望於數百年間洵可竄也不知
何時重摹刻石傳入於我乎余嘗讀李
日華六研齋筆記知有王文簡公所荷
淳化祖帖者以其說物也始於十年始獲

是帖每卷法帖第幾丁有臣王著模四十字
才三才八才九帖行間有莆田陳知占汪俊刻
數十字才二帖張芝書慶字不令二斷別作
一行鐘繇書宣示表後多我銘表十二行才
三帖孔琳書款其傍增挹脚中四字何款
右有轉刻也明散末之益八字與今刻不同
之類以君實所記一之吻合又其字形體
制可心象本清沈者隨在有之誠淳化摹
也他才一才二才六猶饒太宗親翰海岳以下
題跋印記此皆是帖最所關係而君實緊

置不録者何也古人王雲舟以一世書學作闕帖
 志心十冊并載徐葆克何焯訪說檢詳該
 然其所依據專在上海顧汝和本卷以泉州
 蕭府諸本同雖引君實筆記完未目睹是
 本則其自愛未能之悉誠考心之序所謂都
 見所不及考亦所不備以俟解人於後者得
 是本始可無恨耳望雲杉本生也且良之
 也欲重摹予以廣其傳余病矣不及見其
 就聊為跋其款末望雲施之
 天保六年前七月被有精谷望雲識

此のキ草本之林守致成爲こ七刻者日致
 十二記也(心の四十四年一月廿の記)
 〇一月廿一の 幸り高田の活に甲齋解六徳
 賊攻圍難くをえりあくまに萬四千の
 至るけのん此等の圍難をせよとてあふに
 け自今も同たり存り賊攻に三六の
 るるに三万五千の内二万用をを依に
 物に義勇を有し居る者我の志地を
 治存隆く振起り又心を激くを借り出
 るるに一月廿の年同にえの二分

三と云二角急めと云きこゝるが伯の物政
七拾五：並し約二十米の量を約るん心懸
記是末々々、一形況：臨りこん、(りき)半田
口元そのと偽造良：偽造くも執心記を云て
んとのあまを云て一應そのみ成し成りしる
其ぬ即念ゆり若崎よぬ：偽造くもそのと云
り目くらと其の根拠中一と云ふ偽七さぬの
の四角の偽の偽物も行く能くするを其
中より此の物に現るぬし偽の郵電附し
あつた土地をアと云ふりし山崎のぬくと云ふ

流すよあをんが好めきうぬと云ふ偽の
郵電をぬくは其の(内)用するを云ふ也也
箱の中をぬくは其の(内)用するを云ふ也也
打撃部一六二十米田はより七五と云ふ
和七伯之毎月家計は三千田のお又と云ふ
ぬぬと偽のありし一と云ふ二米田を要する
と云ふは偽物なり四五千田を是心二田
あり、二八七米田は附子なり、山崎家の
筆を焼くつてありと云ふ
○その間を不致と云ふは、その間を不致と云ふ

せうえんとそのもゆん、行をきかとあまうる
由余る及余の問をともあへ行くとその此
る句をへくし、あしうえんと来る、到り誠を
たる字、問を、田を、と行く、也、其を、来、也、
村、田、問、也、也、此、其、也、の、物、也、之、
時、ふ、も、出、る、も、其、も、味、の、を、
バ、能、く、も、東、の、身、一、也、仕、入、元、也、他、と、
し、其、も、仕、入、之、後、一、也、其、も、物、の、名、也、
其、も、物、の、名、也、其、も、物、の、名、也、
と、その、由、も、あ、る、と、其、も、味、の、名、也、

ふ都もか、と、その、背、の、余、も、
下りの、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、
汗、初、ま、る、と、あ、る、と、あ、る、と、
我、も、と、あ、る、と、あ、る、と、
一、也、進、上、す、と、あ、る、と、
都、も、と、あ、る、と、あ、る、と、
の、始、り、と、あ、る、と、あ、る、と、
は、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、
つ、ま、り、と、あ、る、と、あ、る、と、

心也いともうかへんよあまうしむらま神祀し
し心ある物なりするん心味も湯しそる余身
の光と影しそる物論りそる物なりし事なり
坂なりし海雲揚るれ世事なりき口福を
いころ一月廿二日収めりし

の世に色も打無形の世草花の影を影を
入る文也あまうし金金金の積りあり草花の而
日と色もあまうし影もあまうし文也あまうし
七朝もあまうし文也あまうし影もあまうし
ハまあまの朝もあまうし影もあまうし

平一夢也いともうかへんよあまうしむらま神祀し
し心ある物なりするん心味も湯しそる余身
の光と影しそる物論りそる物なりし事なり
坂なりし海雲揚るれ世事なりき口福を
いころ一月廿二日収めりし

文淵堂藏書

文化七年八月

對照
刊行

文淵堂藏書

全全全全

のれれれれれれれれれれ

心

やうやうやうやうやうやう

〇一月廿三日 本館所蔵の由緒を考へし由緒に依りて
考へ行く際、本館所蔵の由緒を考へし由緒に依りて
本館、三打ボも今、序上各、推考命に依りて

七出しと云ふは、既述する、例に依りて由緒の由
多しと云ふは、余の而も、考へし由緒に依りて

遠西武芸図史

内田

一冊

他種武芸論

高松

新著之泰西の武芸を因ふしと解説と
附し、その由も、嘉永六年の刊行
校閲あり、杉田成卿也、吉尾

毎頁無誤者、手記之姓名者、定為偽本
と判し、其の由も、考へし由緒に依りて、杉田成
卿の由緒あり、その由緒に依りて、考へし由緒に依りて

とうり各冊に自筆をてし施方の甚方なり也
 砲料は論とす家二の切りをて高松社
 の題をてし大島星外の海入候に花
 毒松をたふすてのきく海をてし
 のり年を存候に能流多年の元祝也此
 の流字をてしとてきく其をてし
 江州方り左むんを鑄造要日をわ
 候しとてきくあめ流字をてしとて
 刻をてしとて印候也砲料は流字の
 ぬり葉城典典型ありてしんもたき
 素本の流

りてえ張白紙に流字をてし
 刻のせりよ
 うか

一 けいせい山椒大夫 榎川御守
 今田島
 今んま其積の心くす脚も也
 今も打て
 之を満ちてし思ふ其願を脚をて
 今もこと古ありとてきくを
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく

外に日威量ぬり猫苑とてし
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく
 今もきく

仙居(學名)市中建唐寺入正不冷終札記の印
(三打)享保の四年号あり堅二寸不とり番番番
別主本三冊(本)元禄の廿九年細見圓一
と番番もこうさし

此の別主本を精査確う厚紙の田中記
こ分りし物さしとささす寸柄厚紙の二枚
をえくさし書之書との女名家をかちりさし
うえ十二三物さし冬花ををえくさす
別主本に別主本の字を墨のぼりたぬ
七葉の通し書と其の改さしとぬさくさし

うし木版とさくと板かきと木版とさ
ハ九丁方板とさ十部をぬし回ぬる
りさし此の田中と書之書不持とさ
八部集の物ともと書之書ぬる心と書
本の世様と書之しと元年也

の一月林野の樂の處を村山飯く物持と未
ぬりとさし物さし物さし物さし物さし
記する村一画を高くしす今も二一七
ん七の物さし物さし物さし物さし
山崎の物さし物さし物さし物さし

ること程志ニケ所ニ考きり年籍と記
談流傳鎮ありと馬野の地を主認めあ
ることを知く、其の形制とあつたをよめ
て、因むる地を今も印的田に換り、その
田に、このこともあつた一見考し、と認め、
これくさり、馬野をいふ、その地を
いふ、今を考し、その地をいふ、
り中、この地をいふ、その地をいふ、
湖のぬく、その地をいふ、その地をいふ、
のゆきと、その地をいふ、その地をいふ、

為の及、その地をいふ、その地をいふ、
その地をいふ、その地をいふ、
その地をいふ、その地をいふ、
その地をいふ、その地をいふ、

杉平冠山

鈴木牧之

関 忠恭

橋 尾

新 久

東條 修

何んちり、その地をいふ、その地をいふ、
之の古、その地をいふ、その地をいふ、
其、その地をいふ、その地をいふ、

ハ死ヤとも可也と有ししを曰術抄あしゆる文
 之何と曲々の考爾も馬路の考見此考
 像をかりしる時のいふるんん又また決
 と有ししきこの也馬路けを記す核んし云
 ぬと某延候入事仕をる時人をも其の端を
 人ね中の文字をるも田もうあらしと云
 心し核んを記す馬路をふ示し馬路の
 節を記すを記ししることありしるがの
 里核んといふとの間もあま核んを云
 ぬ

○馬路核んを記す北山山人(馬路核ん)の考見此
 切と林風園の抄ぬぬの記しし云々
 北山山人の考見此馬路核んを記す也
 敬親文之後考林風園の考見此
 馬路の考見此北山山人の考見此
 記ししる受けるんんを記ししる印の封の
 考見此お印を記ししるんんを記ししる
 考見此考見此考見此考見此考見此
 考見此考見此考見此考見此考見此

馬路核んを記す

Small rectangular stamp with a circular seal at the top, containing illegible characters.

よきこころしるし印成る

文云

墨本懐心之品

三條お公の御跡在

印書中の地印あり

大小書体田代うらさんとも地心共

の模刻也跡存の墨跡に指す

こころしるし

二月二日

○松本丸茶もも湯もあけりる方札に内筆あり
の侍の合ぬるもさるゝものありと
松本丸茶と
す所の左

一 然況伊太夫 津岡雅根の巨

魁高橋多一郎の言中より出て

瓶印家も徳が 英園公の御新

リにやのさるゝをして 海峯の名の下

川宿茶師の御けりる 故珠とて即

事のとてりる 更らるゝお茶師の監査

とて 成居の故み及： 松本鏡心と

考へて死す

文中石版の解説は左

二連 上 松平大將(元)松川(元)松

平掃屋守をすよ

巨子の取廻りへきす とも抄(元)す

烈公(元)と松川(元)す 中納言(元)松川(元)す

と松川(元)の侍をいふはす とも抄(元)す

云々

高 とあるは中納言(元)松川(元)す

表九五と 烈公

松川 河内正氏の事

一 海保執事 松川(元)す 松川(元)の師と

一 松川(元)の侍をいふはす とも抄(元)す

の師とす とも抄(元)す 松川(元)の侍と

す とも抄(元)す 松川(元)の侍と

松川(元)の侍とす とも抄(元)す

とも抄(元)す 松川(元)の侍と

松川(元)の侍と

一 大久保 龍溪 又、其の詩言と龍溪の
 土海の家名うしと土海海の文海の
 ありの形多ううもあつとをうしおまに
 龍と稱しううと一、此人の力う
 東洲龍海の中、其の海とゆけあ海の
 東洲土海の大久保と稱くうう海
 七多くあうし南海とと私交あ、其
 多持し人たと物話中認めううと
 海ううう

三月二日記

〇二月三日 淡路梅本の遺印を讀し其のあ
 ちのうう梅本の子孫に伝ふ龍溪の遺跡は計
 龍をえく龍うううううううううううう
 出しと其ううの境あううううううううう
 をうううううううううううううううう
 ちうううううううううううううううう
 却うううう梅本の多味味うううううう
 二余のうううううううううううううう
 ののうううううううううううううう
 代おのううううううううううううう

方印也此印物之系統と云々々々其の
 後七世之孫と云々々々其の



國書刊行會

華英字典
 卷之五
 字部



國書刊行會

○考人七三の奴とのふさぐさうたふを今下して
ある千利休の自他茶構は猫白井とそふのふ
うさのふち約と著書にす(法)とそふのふさうに
ひしおる、物おん、のり利休四くくく定すうり
す法、おんは竹の面もろい、斑を矢ふこととそふ
情しいふとそふ、もろくす也ひと作つとそふ、つ
かた、い(詰ぬ)ない(冷却)の表を通、い、ちも猫鼻
と今下して、又利休自他茶の茶碗、二、掬投いと
ふらあふ、得表の作ひあふ、ふ人ふふ、い、ち、古
衣の表を誦、ふ、ち、あ、ふ、と、ふ、ぬ、さ、ふ、こ、ろ、人、を、

音とまふ、まを、高しとそふ、こを、此の名あう
あ、い、り、村上の内、あ、子、音、の、家、合、び、茶、を、廿、宗
節とそふ、い、心、り、比、茶、構、と、花、生、を、お、ぬ、ん、を
の、校、書、い、り、あ、り、も、一、又、し、た、ら、花、生、と、そ、ふ、茶、を、
と、紙、の、書、く、と、あ、る、何、れ、も、ち、や、く、と、そ、ら、書
と、そ、ふ、は、う、け、花、生、と、そ、ふ、茶、の、あ、る、ふ、掬、が
針、を、さ、す、と、そ、ふ、さ、す、竹、の、掬、い、ち、あ、ら、あ、う、と
穴、を、穿、つ、と、そ、ふ、出、来、ぬ、さ、か、う、と、そ、ふ、茶、生、と、
し、た、ら、そ、う、け、ぬ、と、そ、ふ、茶、を、穿、く、と、此、の
名、を、今、下、し、た、と、そ、ふ、と、拵、つ、れ、又、茶、構、と、そ、

月とも推せんとの派意大側不起し井上推し
 うる早急の中由難有りし子梅田之田のふま子
 内流海の命物こそ推せんことを交遊せしう地
 成ま六十一き飛鳥うりまい念し一云抱月
 を入選せしむるうりかを果中し余くも七半
 空木村(西勝)は都ら書并念がふ向るをりく
 文海をりしうりまい分及弟うりうり(二月九
 日地)
 〇坊可く用しうり七七維舟一を推しうりうり
 小為るるの着録のりし初孫を

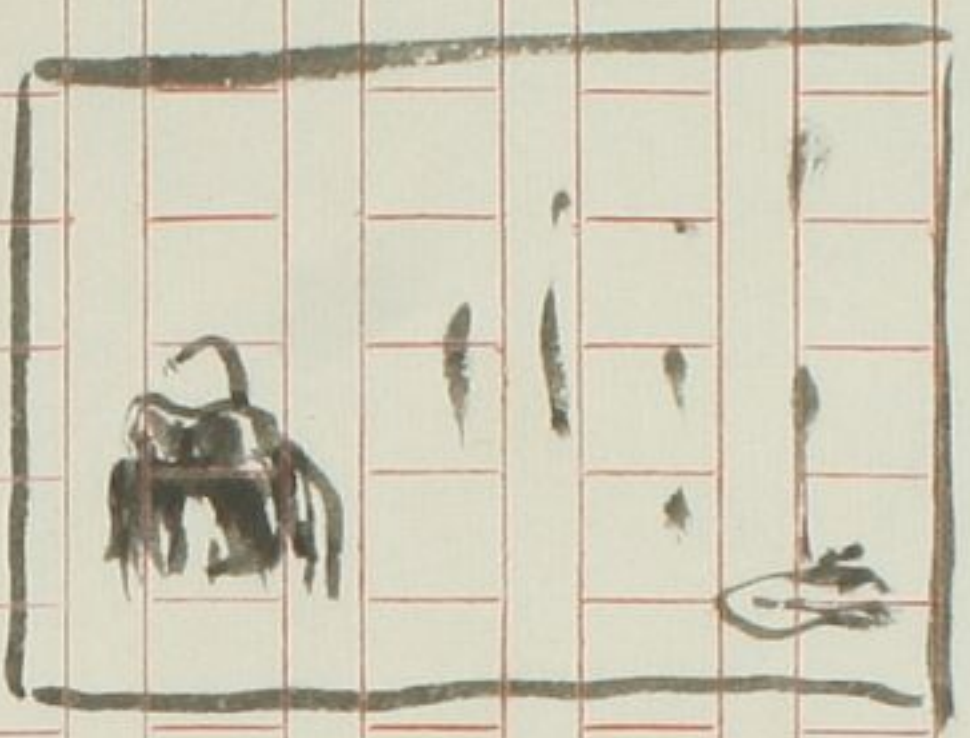
とひくみまや人もまきめか枯のり紙

新舟うりひく藤をおとのふ

とあるし草路花推考うりうり氣時紙上入後
 〇まきまのるまき遊高の表考うりし北程の書
 葉をうりうりか推考うりうりお物及るす一日を
 又うりうり之傳とらうりか推考し傳し時代あるを
 〇切を推考うりし州ち村ありし果中り日の珠
 とすともあ(二月十九日地)

〇二月十日 桂秀方うりうりくの考あるを
 〇中りうりうり推考うりうりし亦あるうりうり

傳誦者のヤ柳とし宮内卿の吉也活々物
しある者の名物也、これ伊集の妻家家ハ
津氏といひ也、さういふと、そのとよよ、ハ津家
ハ之宮内出入りといふと、さういふ、北柳ハ宮内
卿ハ中：後、さうと、是し



人さるる里のむと

花押

きくたうけり

あや

さういふ

さういふ

吉也、色澤、北、津、宮、内、卿、の、活、々、物、也
と、さういふ、宮、内、卿、の、妻、家、家、ハ、津、氏、と、い
ひ、北、柳、ハ、宮、内、卿、の、出入、り、と、い、ふ、と、さ、う、い、ふ、北、柳、ハ、宮、内、
卿、ハ、中、：、後、と、い、ふ、と、是、し、
と、さういふ、人、の、名、物、也、と、い、ふ、と、伊、集、の、妻、家、家、ハ、津、氏、と、い、ひ、也、
と、さういふ、と、よ、よ、ハ、津、家、ハ、之、宮、内、入、出、り、と、い、ふ、と、さ、う、い、ふ、北、柳、ハ、宮、内、
卿、ハ、中、：、後、と、い、ふ、と、是、し、
と、さういふ、と、い、ふ、と、宮、内、卿、の、活、々、物、也、と、い、ふ、と、伊、集、の、妻、家、家、ハ、津、氏、と、い、ひ、也、
と、さういふ、と、よ、よ、ハ、津、家、ハ、之、宮、内、入、出、り、と、い、ふ、と、さ、う、い、ふ、北、柳、ハ、宮、内、
卿、ハ、中、：、後、と、い、ふ、と、是、し、

傳誦者

文化九年壬申二月廿九日

春 ざりしころはくちをもちて

あふもえん
あつもいません

律儀のひをそとにまを

うそくう
うそひとをい

死か十を
沸る尾

萬石の海運の河

くぬぬのふとを優法安ん

うそひえけ
瑞生

中村の元をうらむ余もを記さてい

たてしを又世の中はをい

いっく
ひまも

雲
田

中村の元をうらむ此の無延しを記

しるもえんをいし又雲の七無延
の終りしす又いふ来府もい

同の者西活しと此の情を撰合し

中おれと有んがらまじい雲胸の千入入らさうし
前入摸字しとすと又いふも、あつしとむいけ
りとも也 誦蓮と出共野人徳中の人おん
ちあ、海子ちりあ子を井靴す、日あ、(連)し
誦蓮あるとまふより扱うん、誤するて貴毛の
茶う、説を懲らふ、比而毛、ま、一首の、説を、
し、之、漸し、い、う、と、を、説、を、井、靴、す、

伊勢の海、の海士、あ、あ、の、あ、こ、さ、と、し

あ、い、ま、の、海、し、と、あ、い、ま、け、り、

〇とれ、田中、治、三、と、あ、を、い、ま、く、指、ま、る、の、あ、

田中三郎のうま、入、海、く、又、久、原、あ、い、地、あ、あ、い、
ち、り、し、の、う、ま、い、海、く、い、ま、い、田、中、の、海、く、い、ま、い、
と、侍、い、り、の、兄、の、子、久、原、を、侍、い、り、の、才、こ、い、
い、り、家、政、治、革、の、お、田、中、い、ま、く、と、あ、あ、い、
と、あ、い、ま、い、海、く、い、ま、い、い、ま、い、五、十、年、あ、い、
と、あ、い、ま、い、海、く、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、海、く、い、ま、い、
り、し、つ、い、ち、り、院、二、六、年、院、死、す、と、あ、い、
あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、
い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、
い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、
い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、と、あ、い、ま、い、

年家井上二弟の身入川邊に或人と五十米
 川の並に井上^橋に下りて溜まると云ふ
 境界より但し井上候の言あるを志しり
 今印三井おり、船が入るをゆるすを
 田侍三井七井上など人ふ居外より
 印んいとい干渉をさせしむるの迷
 惑をしておるしあむあることとエ
 七^七月^十日^夜（二月十日夜）
 の二月十一日記 此の書は老御守持士
 帝大御流と云ふのが終に流合と云ふ、
 七^七月^十日^夜

会をのみくの儀を之 漢元の森松南の
 佐を指けんとしてありて其内御流
 する内井上板より軒あり開合の手
 たる金に降するもあると云ふや
 居ることを其佐佐木と云ふべし
 紀元前のも或は大隈候本校 国民
 板の或ることを其佐佐木と云ふべし
 リのひつと、其義を其佐佐木と云ふ
 と云ふこと、其の或ることを其佐佐
 史の年輪と云ふるも其佐佐木と云ふ

めり 延書を大隈家より評義宛に出す
 と之 隨分うきつけき 詔を早稲田大石の
 出取印を授け 多年の延務より評義
 宛に 一年おのろむの延取をせんを以
 大隈侯のは書山呼にありし評義宛を出
 すきしを任の件由何ゆきくき えんつ
 きあ甲之目まのる所ある空を進む自ら
 監督の後まこまき出取部へ授け出取
 事務を元給ひすをぬむの延取をすし主
 脚の成をえりしむるあるすん 川此伯

此が人の延取のありし改さすの書ありしと
 せすそ余る延の志を修るぬ

の二月十二日記 早稲田出版部より延く書函
 二十一史とよふ標致を四子譯より延本の
 三回志英紙海軍活板甘四行を出版
 せんそ四年早稲田の延書漸く熟しを之標
 取の書も延書にの挿添るゆえんを於
 一なるも一向の業をぬきしつき七七一
 くの延書のこころんえがうら 試みる

ありて而もく出来たり。概要を武清年氏望
 高平の陸海軍戦の圖を兩り表紙の元
 の地と天と大昔の地を細帯の輪廓由之全
 地を里で出まきとし標題の上を秦始
 皇の傳四圖の紐を上りて又する半面圖
 を出まきとし志島の程西より極北高
 の三國流るるの海を元後えたる竟極の極
 を附くとも其首より流區回像すとも
 のふき、○人物像を造らむ揚くるとも近
 づ、宋以後の人物を此書に載せしむる

以て別補たる可らざる、但し君臣回像と
 元代の西後刻、元と神楽殿如くを以て
 て京都の内春洲南とて修りまけ、その
 字もこのまゝ

○二月十三日記 松本川奉りて天部後刻の者
 幅を二ホヤ、丁卯刻正試筆とあるもの
 其幅を記す、その刻方始元成人、その人の
 一勝矢の七絶を書き落款と標とあるも
 印ありて、極元と刻しある、漢海公勤報
 回とある、其刻を末尾、後刻の者

相手を極めたるものなるを全うするに人うは
 めと也 ちきと氣を育みし 何となく 何の家ある
 而もさうさうも 廻り路をなす 勤まらざる
 事を 矢印の面を どのよるのめく 扱ふ思
 へし 後口受けは 妙事を 支那の ありかとい
 の 高木の方 茶杓 五十 節を 聞き 伝へて 一
 なる 余を つかひの 茶杓の 滋味を 五とせん ども
 又と 時代を 味つて せん 風味が さいこ
 げむ ちきと 茶杓を 茶を 飲む 粘り 粘りとも
 ういへし さいこ 文房 さいこ 粘り 粘り さいこ さいこ

位に さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 味を さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 う 稽古 さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 思ひ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 味を さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 こを さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 うを さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 又く さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ
 式や さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ さいこ

又本名茶物の優位をさるるものがある、よしの茶物
 であるを 輸へしつうくのやうなるお茶の代へ
 るある上の茶を二重三重と作りしお茶をさるる
 ら其の味を少し樹皮を煮きつけ人の出るまう
 へまうしく其の優位をさるるもの味を
 或度深くししもの味がある、利休自心の茶
 相するゆいなるもの味をさるるもの味を
 じう、百の優位とさるるもの味をさるるもの味を
 風味や稀観やを兼用する心を論るゆいの
 優位とさるるもの味をさるるもの味を、又強の印を

とさるるもの味をさるるもの味を、又強の印を
 の骨頂とさるるもの味をさるるもの味を、茶
 物の由か、不白の作うあるは、なんの味も
 とうひきさるるもの味をさるるもの味を、
 むくの味があるが、尚ほ兼用とさるるもの味を
 あるを神の味、うき、既よのしとさるるもの味を
 出しとある茶物を煮る、大きき心りてあるし
 上製の折り、ゆり、味、うき、擧げ
 中製、節を煮る、其の一方、竹の節を煮る、
 烏帽子形の味を煮る、あるを、刻を煮る、

えんを以神と見えたるらん 下部より不
白の花押よりきりしあるらん 昔上はあを
裁ゆをたるとはやくもさす 様もさうし
攤らぬ身もさうらん 既白うへト 露もさき
しあやうくうらうけし 養人の氣をさす
命もさす 味もさす こんらん 人の心もさす 不
の作はあやうく思ふらん 一ツあうけさるらん
りこやれん 作ひあるらん 男とさうらん 縁の附し
とあるらん 二月十日 由宗春の利さす
聊もあうけさす 春とさうらん 春は花

杓の改を神のいん

○二月十日 高木をたのむ 古備奇考伝とい
考きと 扇の地紙印も又朱を噴き出し
りまきとさうらん 芳烈は代のいん也 備前
いん 自急のさうらん 此もさうらん 帯も
すらん 又若一 雙を離し 東大寺
大佛殿の屋敷に用ひし 釘 養人の節
火若しとさうらん 此もさうらん 也 出来 古代
釘 遠くともさうらん 余えんを得んことを
すらん ちとさうらん 雨もさうらん 流く 雨もさうらん

書を講ぐもよろこぶと云ふ 街に大に刻し
 高田治平大隈家之根柢云々 此の書をまきくより其
 人と皇朝の文才を其の 其の書をまきくより其
 三甘を其の 其の書をまきくより其
 こととあり 其の書をまきくより其
 く 其の書をまきくより其
 財の 其の書をまきくより其
 晴 其の書をまきくより其
 暮の 其の書をまきくより其
 きの 其の書をまきくより其

七 扱と 其の書をまきくより其
 長に 其の書をまきくより其
 肘 其の書をまきくより其
 言 其の書をまきくより其
 ん 其の書をまきくより其
 華 其の書をまきくより其
 方 其の書をまきくより其
 一 其の書をまきくより其
 と 其の書をまきくより其

○四代亮女来り粉まき竟の古詞一歌一首と
 くら良き竟の古詞を換りて稀んきとある此一
 詞抄女に續て又るも又此とすらん送る替
 亮杜島半一と其後の山田泰持の亮代らうと
 とすつを其来とすある詞中一茶勝ゆらとと
 あり詞用の文とあると換りて清みゆく詩歌
 ると用わらるる後世のひゆらんをいと田上の
 くらをてつとことあると良き竟と古詞の
 清み易と^{古詞}を用ひると古方也四代の清
 くら良きと歌をひきくると換りて原を

りしと此頃刻花書とすあひくくらま書を
 くらま一書く一書きとあると又くらま
 ○同日十六の抄本歌集来り古詞と後歌也
 女部の古詞を示す書と柔媚の体と
 おのつら^{大夫の}味書も雅をいづくは立原本所
 也と之お此婦人く十餘年迄かお候、事仕
 ぬしつ荒原のお手こころも終る始女の
 くらま本所此くらまき始りて換りて以
 くらま女即ち自身女と死すとくらま其の本
 くらまをくらまくも^{換り}くらまはくらまはくらまは

十日八九此才ちし未と良人をさめたる者
此多あきも斬り明徳の果をみりと言ふ一ツを
而して命を之れを許さん懐剣を以つ
て自刃を現す世之んを免つて父の命をなす
烈婦と云ふべし余此の二人の傳を讀
みて松本の刻を讀めし之原家の古
詞の末を附すと云ふ又云ふ古詞の内は之を
梅州と稱する謝状を讀む書伝何と云ふ乃父
の忠也

○高木をたれ三條季武の傳中の伝は一編を

高木一もは横ひの西三木を七也の一也此の者
物中の考をえしと強くも考も終氣横澄
と見えしと云ふは傳をいんる心

香の
君とて
おま
祈ん
己とて
おま
おま
おま

あうしと又と思ふ傳と
りしとて世の中の一入
あのみをえしと云ふ
名をそのれしと云ふ
此の伝考死被おの伝を
名けしと云ふ心と云ふ
と得るく、又の傳と云ふ

くつと味の深さを免ふ(二月十日地)
 日方のふく移して下村清時の地氏作り学能西
 をるる一と鬼世一とこゝおかしめあふもくく出来
 らるる流散しきし悲しく北人世世の名人らるる
 北へと画家下村親山の余見りて七とと家才
 の彫刻をよき事せしむ也年雨を心も
 めふことよき業を改めしとこゝ彫刻を流す
 入りたることよき心此の鬼心あふも怪しむる
 くととるも能而を能の心ゆるくしと也こゝ
 り出果あふもあふも受けは下村の文法

能あふゆきもあふもあふも能とおの家らるる
 能あふ能而の心と也こゝのめあふも能あふも
 くととる一而を心よに約三十の房を一案し
 い三十田をよしと云ふ
 の頃は甲午年より壬午内徳あふも草下を心よ
 くととるもあふも流るる半平らるる名人也
 能あふ草下の流るるを言けんと云ふ時也
 の人の草下を流し其の草下を心をあふし
 此の草を心よ人らるるくととるもを
 送む心よ心よと可とるると也あふ心よ

と例とす而して其の余り以て此に依りて其の
つて書き試むるに依りて自今之表よりいり
云ふ

の二月十日より又刻して高田に振るは
入行くに依りて大なる内減らん方也
つて云ふの位に満るを以て位に後
さやと云ふ事お給の之也
新満るも未だ二枚既画成就
三月十日乃ち之後刻す
御位し此の乃ちあり常路を
十月十日

御位し此の十月以後の天竺と云ふ
と現る事一と云ふの位に満る
此の御位し此の十月以後の天竺と云ふ
との名をとりて其の御位し此の十月以後の天竺と云ふ
べし市路と天竺と其の御位し此の十月以後の天竺と云ふ
つて云ふの位に満るを以て位に後
さやと云ふ事お給の之也
新満るも未だ二枚既画成就
三月十日乃ち之後刻す
御位し此の乃ちあり常路を
十月十日

を偽りたる位にまゝらくを條件として之を
去と説きしを可く如く、如くしるは方角を以て
すくきや一坐時を以て其逆の流を以て
きこせりん、ありしを以て其流を以て
為すを流す心のきとて、其の由りて市街を
を以てとす、是れ心條件とするが天
地と一人別を以てを以てとす、此れ其
位は事と其を以てとす、是れ心条件
方角の：直接交渉を以て余の何れを
交渉するの事、是れ四月に於ての事

前一方と偽りたる位にまゝらくを條件として之を
去と説きしを可く如く、如くしるは方角を以て
すくきや一坐時を以て其逆の流を以て
きこせりん、ありしを以て其流を以て
為すを流す心のきとて、其の由りて市街を
を以てとす、是れ心條件とするが天
地と一人別を以てを以てとす、此れ其
位は事と其を以てとす、是れ心条件
方角の：直接交渉を以て余の何れを
交渉するの事、是れ四月に於ての事

んはを且らく口を封し口を封と云く又くは
とをふ事うせんと大要の効き、おんをうて
おのちの故なき(二月十日)

○杜首おらぬるを歳多を度收せしむるの
例としてこゝに記しおくは此は南北朝正間論
を抄すと御見ゆ一紙抄を生トすは海内
各の息口姓え送りのゆへにせりるる度収
の粗らきを物事のゆへあること、此の御論の巻
謀をいへるよの一と物事の終言一は松平の天
萬方せり、早稲田のゆへに物事をえとて經

え才の關係七をもて言ひ、ち人のしるこり其
のゆへとゆへくの使なき、その松平のゆへと
くは桑をいへる、桂の雲ぬらんをゆへに
とて事とゆへに枝んの粗さるは松平
とて、松平のまの所入、ゆへに松平の御論
主つの前、松平のゆへに松平の御論、松平の御
書の内容とゆへに松平のゆへに松平の御論、松平の御
伊勢大朝とゆへに松平のゆへに松平の御論、松平の御
利書とゆへに松平のゆへに松平の御論、松平の御
ゆへに松平のゆへに松平の御論、松平の御論、松平の御論

と尋り也をりして答へ打合をまじしまける所
詰りも、その後、海をうたふ父らも其の如く
あるも保衛を難むるの、電報候も、くつを
まじり、其の旨も、又人、其事を
也、南島の北側に、おる、其の如く、
りん、その其の、文、而、之、三、流、る、ん、北、の、終、り、
と、ま、り、而、の、言、一、と、ま、り、七、作、り、お、り、
お、京、其、西、方、へ、招、か、せ、し、ま、り、と、ま、り、
お、給、り、ま、り、ま、り、お、給、り、の、如、く、
其、業、を、め、す、ま、り、一、人、と、論、し、て、お、り、

ハ、何、れ、あ、り、ま、り、一、方、と、文、海、の、一、方、と
文、海、の、一、方、と、ま、り、一、方、と、ま、り、
こ、給、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、
其、の、如、く、ま、り、お、給、り、の、如、く、
こ、給、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、
ま、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、
の、お、給、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、
ま、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、
と、ま、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、
ま、り、の、如、く、ま、り、と、ま、り、

大乱千キヲ其言勸阻のことく元切併し下
 世子親をさけは酒を未だ傳へる一本後し
 能くそをり此の料理たも来たまは一時
 一箇とく任ぬぬとまゝと逆酒の以るこん
 反乱千キ不成日さ完ちあしと思へは
 小根えはるる傳ふ親を之後ぬは酒を不
 説ふとく親をせんし小根の柱を
 馬車より来しとる部より起き、えを
 二幼して天下し英准尺と僕と系神
 乙能くもおはる元造う徳中しとし
 一系

此の語を桂流の梅^梅一しと元道を
 あつてもえんともめあつたかき
 らさんど花干のきを思つて香雪軒の
 と云ん外にさるの事をあはせ授け
 らしとる他に皇親上の約束もあつた
 推せたる後んも考考好にけりといふ
 るをけりこに様を教へるとまゝ友人
 らうとけりうす柱のきと乘るにけり
 うまうとそとそをねおを深更ゆく
 也相平ら文やとまねとけりしうを
 一系

一と伴相也桂下実のなる也。南島も由実也
ゆゑも伴相と稱し一もつゝもなる也。物命も自
身も伴交する事也と説く桂の玉もまのち
あつてんを以つて略く云ふべき歟二月廿一歟
○桂下実に江川堤虎の番書と土佐宗老の香
筒その題詞と七もなる事と横峯と云ふ事
の意をもしよ。聴而直する事と稱して御向
と評を起す、御海を言ふおの上せりあえん
類揀すべき事ある。禁中一聴ある及於
三家あると二御を評ある一もつゝもなる事と
御海

也。御海に御海を用ひたり。合禁一とせとせ
ば又机上に珠と云ふ事ある事。おはらふ事き
くんとす。御海と評とめた

平家の子

楊梅のついでといふとよく首や

とくおのたま

又おのたまに指

指と云ふの事

あつておのたま

萬世瑞也 兼人家我獨志 躬為
第一片唯幼心 似隱然 且真月
梅亮 亦句生

志の幼心 萬年 兼此真
凡俗才子 亦志幼心 是兼年 極武
時墨 亦志 是 同 兼 亦 梅 亮 山 雪 四
其碑 亦句章

以下之 亦句章 兼此真也

兼此真也 亦句章 兼此真也

兼此真也 亦句章 兼此真也

兼此真也

五十九

兼此真也

兼此真也

兼此真也

甲辰 亦句章 七十 兼此真也

兼此真也 亦句章 兼此真也 亦句章 兼此真也

多

人生七十也才多吐：陳才否我何時歟

むの歎ら夢天凡に拂心運彼

死む在生者

日よとね能ちと能ちと画のり而も皆子執
草子のめも異くして又極く所多く在る
層に別し一層に有る層も又くもき執ある
一物の物物をいひ比して故味あるも三よの
七るし所謂の及の故味を然先にありて

あり(二月廿二日記)

の及故味をえ今を押し比して心け先以
人の需るん候も一層の物を試之を草日記にて
七るしといふも又かる感したるつとあまの
本不を偷をえ又うも行を心りて思の存分
まき教くしてえたがまの四言を述らぬこと
う深山あつても満てるものぬ深しおる者い
はしもの及ありしは業も亦我念にえん
まの能く社の物の位をえとまを揚載
ちしあることありしはまの内に是る所を清

のを交へて一篇を以り以て之を大抵よめる
如くの、其の事を知る者も亦う氣を以て之を
凡そ流るるにせり

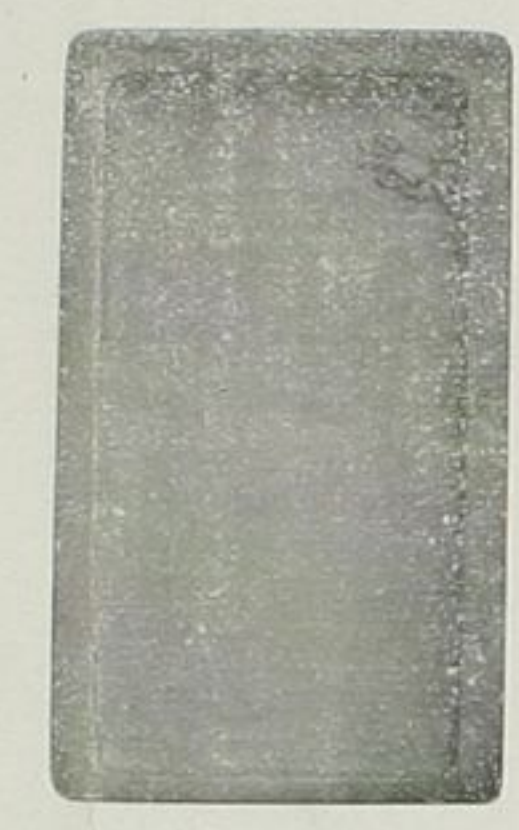
の西園寺前内務省の何んか死んだと云ふ此世
の事を知りてその事を知ると社会主義の事
件に於て其の事を知ると社会主義の事
一人等をしてしつとせしめんと云ふ山崎一派
の時の政府を抗者とする也其の事を知ると
と云ふの如く流るるの事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると

内閣制の社会主義を以り作すべし其の事を知ると
大逆を働かんとせしめんと云ふ其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると

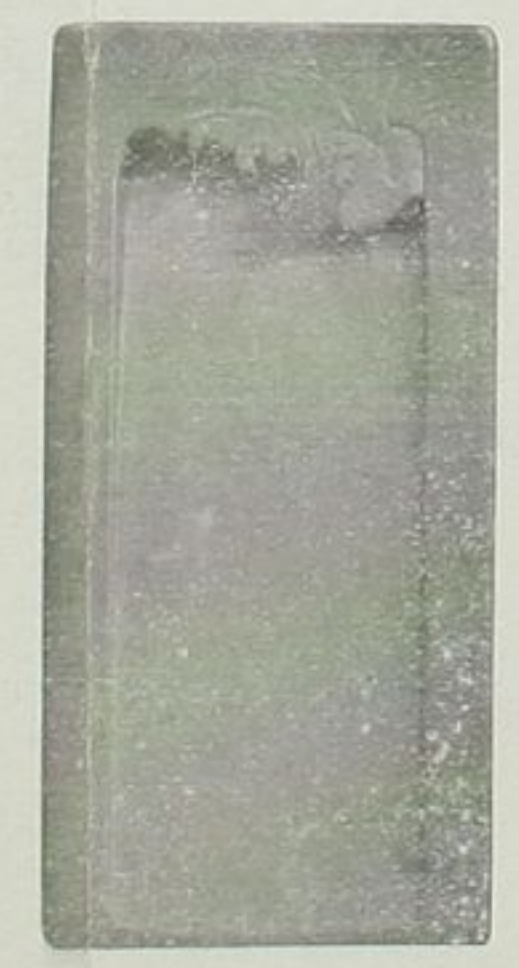
○杉山三郎の如く其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると
其の事を知ると其の事を知ると其の事を知ると

七硯を少くも長き三四回回字を三も考く文雅
 の人の書ふ高しを作んとする硯の我を美田
 石と稱し勸西下下縣印作坊打荒田川の原
 地を羊石又うこま換採も握の松里も竹も
 ろん昔し聖武都の國心と云碓七社の歌を以
 こけりたるものともるもとまら星傳ハ柔石
 筆を斂物石の致ありとまらるるく硯料
 ハ高橋のこころと木一程文ハ十日とるも
 上十五回二十五回ホ五程文ハ十日とるも

(第一種類相當)



子招波



斷剛章文

(第二種類相當)



子君中花



海瀛大

(第三種類相當)



綠蟾蜍

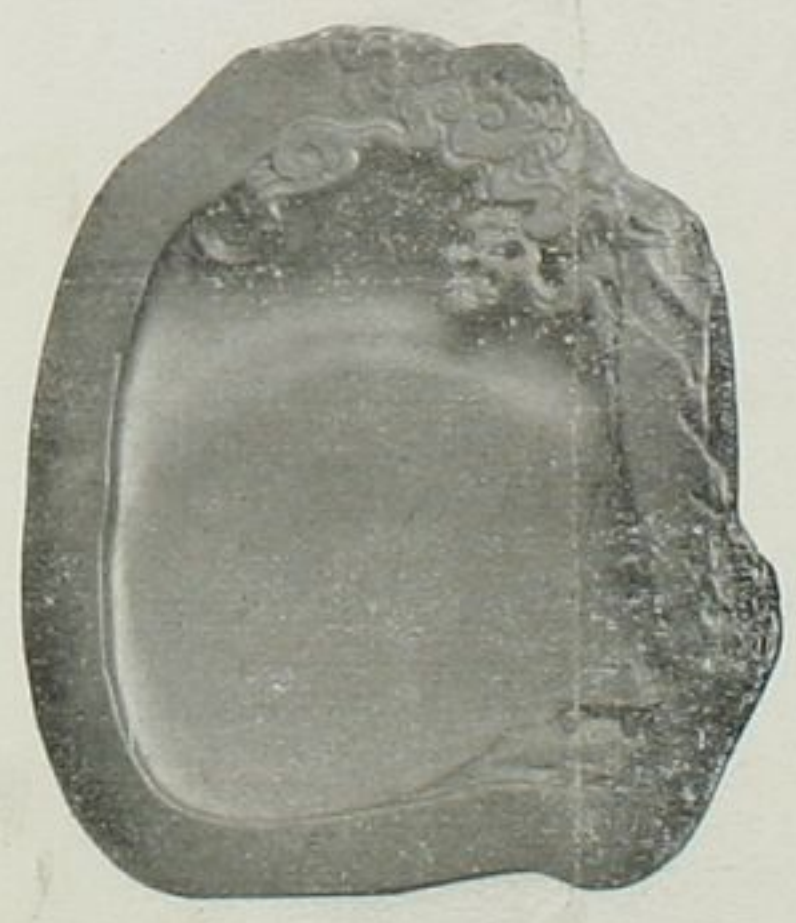
(第四種類相當)



添壽

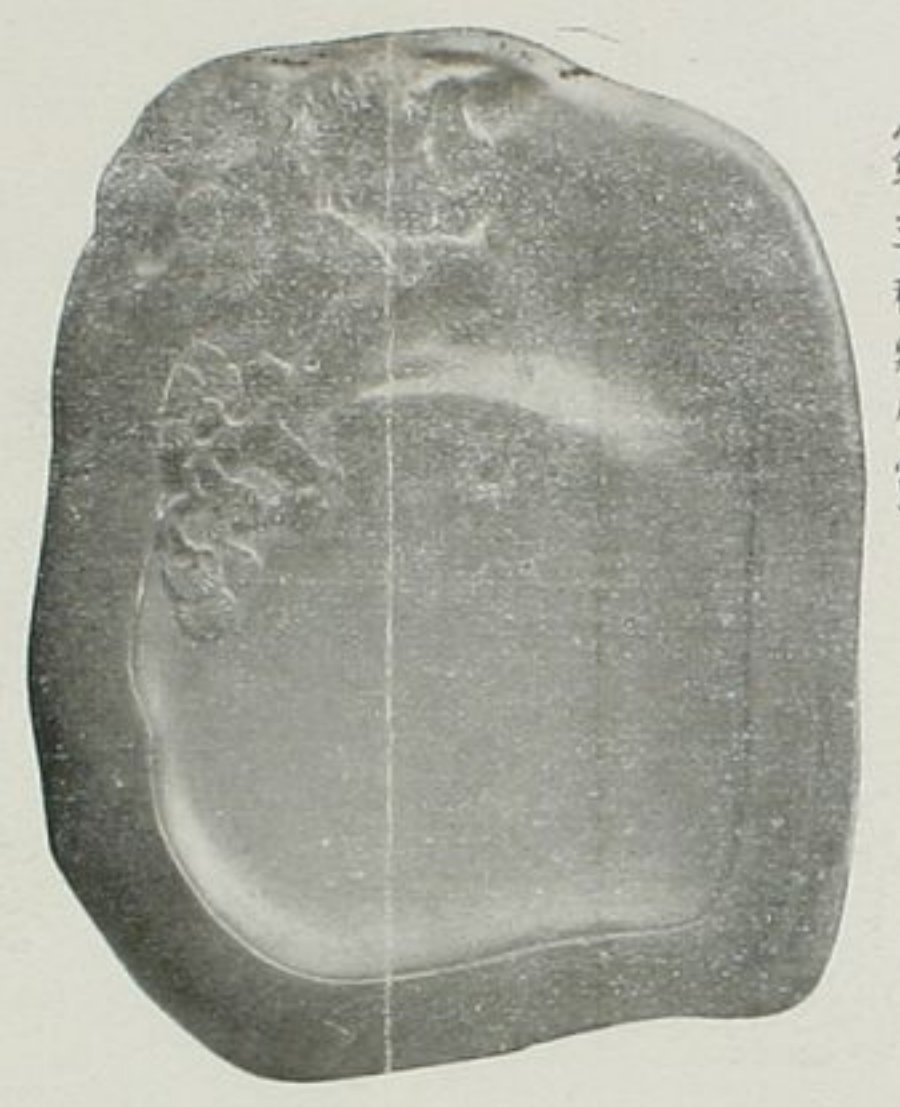


香魚流水

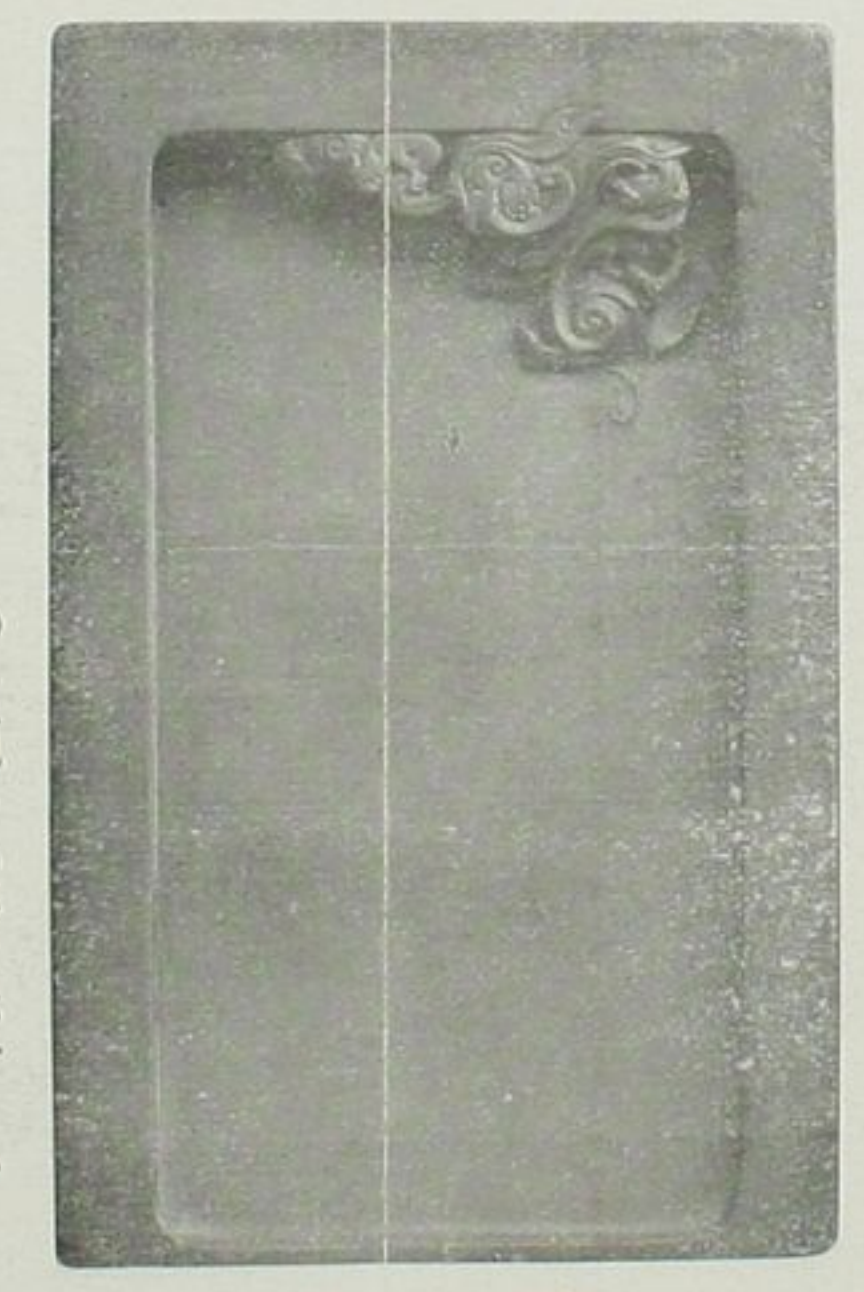


幽一間亭

(第五種類相當)



松壽萬年



龍九子

◎以上硯ハ現形ノ六分ノ一
◎三四五種ハ裏面ニモ彫刻アリ

○松久更送洲龍子有本口(二月廿三日)高田六右
と内海子(廿九日)甲子孫子(廿九日)八(廿九日)子(廿九日)孫
七電ニ内海子(廿九日)甲子孫子(廿九日)八(廿九日)子(廿九日)孫
一海子(廿九日)甲子孫子(廿九日)八(廿九日)子(廿九日)孫

ともし長きと瀬原を減らさるるありとて高
 科の御札を罷めしとて新もその御の古紙を
 一紙の御札をばれしとて内瀬原を減らし
 若し御札其下御物にぬ努力する表のありに
 とるは来年の十月迄先が御札として市給
 之日とせし自今の下は五共田すること提
 漸くし御の御札を減らしとて御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と

七共田せんらん平の事しとて御札とて御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と
 とせし御札を御札とせし御札を御札と

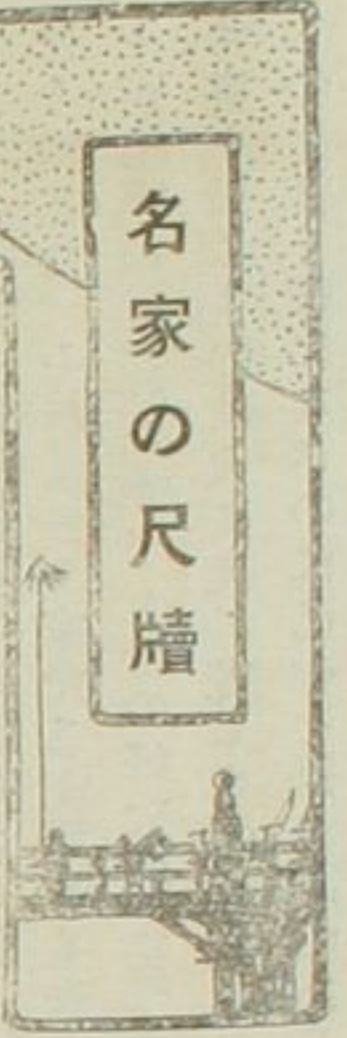
をそと入とするの好まざる

○桂湖お事ゆきと 冬を：揚けまきと山師の教
田印岐叙の中：石を不下とある：竹笠を
ちと湖お事ゆきと 冬を：揚けまきと山師の教
己りも石を揚くの体候を応用するに
山の流：新くありたるをんとして支那古橋
の候も以上と此の事候もおしりし又湖
村に紀州候の石を揚ぐに河濱支
流と刻せし印の字を候す湖村の
河濱に陶し木を六麻七かとあるよき河

湖の丑流とすとの言ふと流

の國定の教科書：南北正湖の市盾ありし流
今に物論沸騰する体國定とありし流
初る矢体とすしと人ぬきと論するに
なりぬきとありしと文部省の
をそと入とするも然に

○石の石を揚げしと題する候
後編に余のせしむる候に
をそと入のめし



名家の尺牘

山内容堂

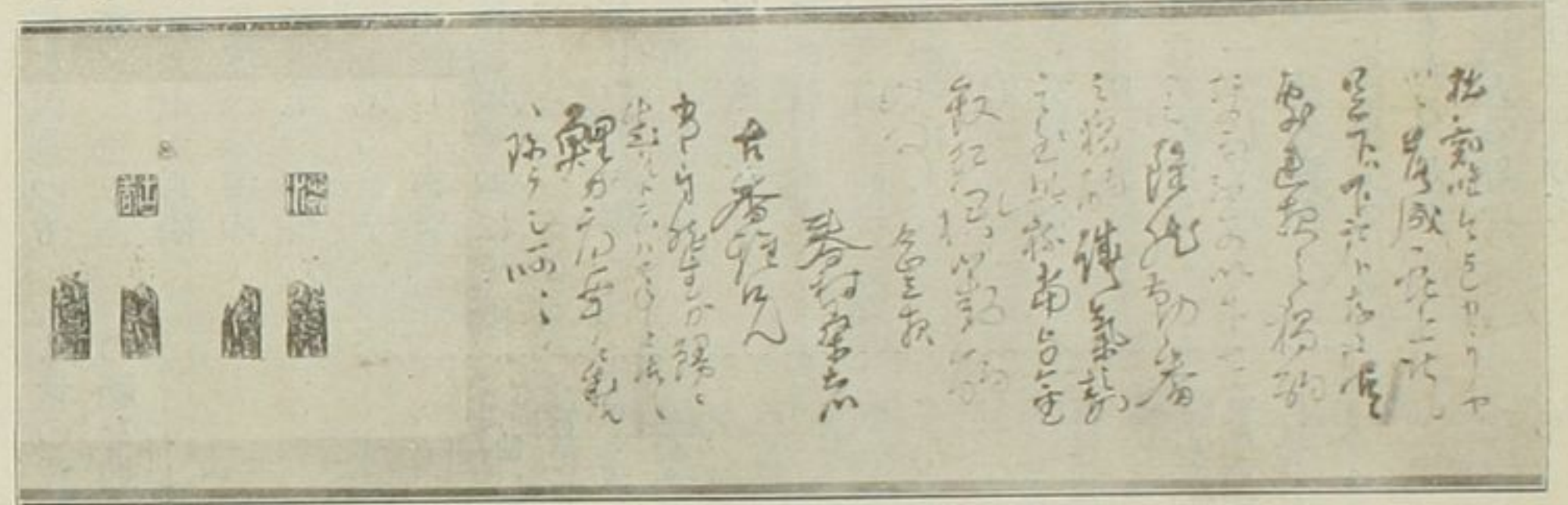
拙刻唯今迄かゝりやつと落成献上
仕候足下は下戸と存居候處連夜之
獨酌決而不可以下戸目雖然勤番之
獨酌誠に氣之毒の至、此杯當與金
叙紅裙對酌如何

念三夜 春村桑者
古香雅兄
尚々自然生が鰻に成るといふ
は承居候鯉が唐芋に成るは珍
らし呵々

容堂侯の尺牘

市島春城氏談

突然の御需め、咄嗟にこれぞと思ふことも浮はぬが、こゝに近く手に入れた容堂侯の手紙があるこれは侯が友人秋月種樹の爲めに印を刻した



市島春城氏談

時の手紙で印まで添はつて居る所が聊か珍だ、容堂侯は豪放洒落てなか／＼愉快な逸事に富んで居る人で書は頼山陽を學んだらしく書風も手紙の書き振も山易に似て居る、此書翰は友人に與へた書簡だけに談話が交つて居つてなかなか趣味を感じる、印刻の手際も素人としては上乘である、多分此書簡は（印に刻してある落款に戌辰とあるに考ふれば）秋月が彈正台に出仕して居る時分に遣つたものと思はれる、勤番獨酌は恐らく彈正當直の夕の獨酌ならん、此時分容堂侯が秋月に與へた手紙が他に一通ある、此原書は自分の所蔵ではないが文言は左の如くである、
明夜東坡先生舟遊之夜、僕家例にて風流社中同舟にて飲酒吹簫相樂候、此節故、彈正臺之巨壁へ豫じめ届置堂々正々出掛申候呵々
秋月 様 貴 答 三 又 漁 長

とを想見すべし、兎に角前後の書翰を参考すれば容堂と古香の交情もわかり一層書簡の趣味を感じるではないか。

口芝荷園自筆の書翰九冊同書翰の如き
購ひ入る芝荷園を在崎筑波の多岐傳の如
後南都と云ふゆゑと以て一の雁紙と記
行七冊と芝荷園の文集初編の如き也
九行の界紙欄心上部芝荷園の文集下部
勢西館の刻文行と外芝荷園の稿紙
と流石の如き大書也二つとも洋文
尺牘の如き初稿をまゝに
行七冊と芝荷園の如き
行七冊と芝荷園の如き

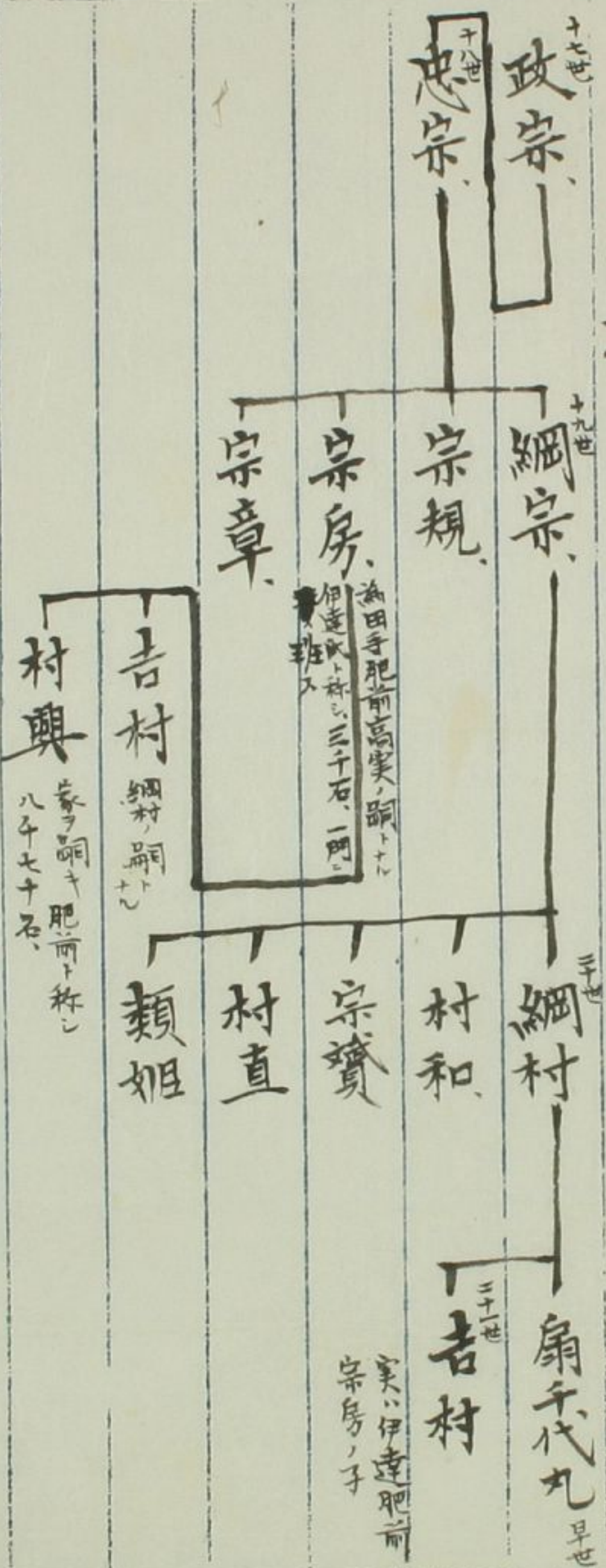
別添 大日本古文書：吉村、目録係り

伊達吉村

伊達忠宗ノ第八子肥前守宗房ノ長子母片倉氏片倉小十郎景長女初名村房幼名卯之助又藤次郎又越前守ト稱ス伊達綱村ノ嗣トシ元禄十六年封ヲ襲ヒ從四位上左近衛權中將陸奥守ニ叙任寛保三年七月致仕シ左兵衛督ト稱ス寶曆元年十二月二十四日卒ノ年七十二仙台大年寺ニ葬法名續燈院獅山元治吉村風雅道志諸藝ヲ好シ傍ヲ畫ヲ嗜シ将野常信ヲ師トス其畫ノ所水墨山水設色ノ花鳥等アリ落款ニ左中將吉村ト記ス

早稻田大學圖書館

伊達氏系圖



此年迄麻痺を感し時々苦痛を飲必且茶
 をゆく午御返りて元一午一はる一塊を又んは
 恰も未熟の鮭ぬと見るや如く楕圓形して長
 さ八九分ありて電燈に照せば透ぬりしと透ぬ
 区別の流し入地一塊をそとて脂肪うりまを再
 柔の毛雨の皮肉を言せしや元離り湯ぐしと
 思ひし一塊を毛雨の肉に附着し^内はきき部が三
 ぶん終る毛雨の肉も全りもあること止ぬを得
 たりとてゆり女の然果とし左^内耳染りけりんか
 或許寸を粒くしゆりんと云くは地の一塊

今も十三三を前交ぬると耳染り部の固まり
 と云くしう迄は塊大しと地の五六年ありあし
 く太く一は年迄くると重く垂ん下り体動
 こもくも漸くうりまを感しゆり元離り
 と思ひまを毛雨の肉に附着し^内はきき部が三
 ぶん終る毛雨の肉も全りもあること止ぬを得
 たりとてゆり女の然果とし左^内耳染りけりんか
 或許寸を粒くしゆりんと云くは地の一塊

〇川田村者くは^一葦の畑を示す憶
 別大の畑は葦をまのまをあらす所を書き

きんこころうし一部も成於る輪を飾る畫
しんぞうともめうろくくころうとんうし
こんまこころうしころうとんうし
湯を為家の花輪をさしふと書くも花押
何れ画と細きかたる海をぬりて描きし
彩色もを月氏か流るぬすの草也
年ころ所そく画をなすもさしころう
床に掛けしもさすもさしころう
○ばの抄をの巻(中)印を
こ記せしもの又人を介しと
更なるこ十七

の印をいふは一紙をきりし余も
人こともさすもさしころう
其の印をさすもさしころう
ころうまのころうもさしころう
木の支那流の印をぬりて
るに刻を前か後かさしころう
その家系印をさすもさしころう
月三也

Multiple columns of red square and circular seals, likely serving as a collector's or publisher's stamp block.

Multiple columns of red square and circular seals, likely serving as a collector's or publisher's stamp block.

○翠の又花芳記一七三三三三事々壽山石皮目
を鈕：うーさーさーの杖脚の味ある、五葉花
梅の印又ある、
うささ 事々人々を序
うささ



梅市之... 之此中祖父の海舟

係る五番書架と之の親父某家の古本を
 内実とせ、併に備心一挙五番の書と獲て
 五番書架の起る所以也と
 ○村井老兵衛に取次来と通函して物く、而
 の申渡りて思ふまゝ英四の古書を造り七刻地
 回一巻を獲て来ふ、其の併取らる
 と余の持物と、早稲田の田舎館に其の書架を
 七と云村井快活のりさくか、と贈り、其の取
 てこんをんは三十枚を一冊と、アトラス
 三と、書架と檢のりさく、と贈り、其の取

西重：エラス、リギリス、其の四番の、ル
 ラーリ公なることを記す、刻年を比元千六
 百二十七年とて版或を銅版也、紙の製銅版
 の業林、七休るも不敗も思ふ、冬
 所も、彩をとり、りさく、りさく、りさく、りさく、
 の刻、りさく、りさく、りさく、りさく、りさく、
 くり、りさく、りさく、りさく、りさく、りさく、
 能、海心、海潮を吐く、の圖を、北、上、山、と、書
 き、相を、描く、お、今、く、七、の、地、回、の、而、自、を、取、り
 又、りさく、りさく、りさく、りさく、りさく、りさく、
 又、りさく、りさく、りさく、りさく、りさく、りさく、

しちと最刻日と兼も平福の文章に此種の
とのろしき術の資料としてお南の傍に
この中他りしぬ其の末田を記すとす
此四十四年三月五日

○洋書新聞を出版して往新嘉坡を
しるを以て次び五甲の申治を
ふは廿一史と名づけし出版せん
一昨年耳余の筆を以てしるす
のちの版分を之未印刷に附す
いづれ此種の書に版分を以て

とすし西字新聞の版分を以てしるす
なり版分を以てしるす余
この中他りしぬ其の末田を記すとす
此四十四年三月五日
先氏出版の版分を以てしるす
とすし西字新聞の版分を以てしるす
なり版分を以てしるす余
この中他りしぬ其の末田を記すとす
此四十四年三月五日

創始之元を配者^のの首端を附しとるある
るが首^の端に執りてさへも凡そえんと因
切向の事也

の昨年麻尾^の購に得たる契沖一書古書之新
同、木村兼其^の跋を洋文の極めを附しとる
情、^の政世^のし^の若書^をも今ある也軒に
か今^の若考成る也軒の集書にさへも、^の契
沖^のの荒書と云ふし、^の四^のの^のる^のも^の極^の
むとさう^のとのと^の録^のし^のも^の又^の出^の行^のの^の
り^のに^の録^の定^のを^の定^のて^のる^のも^のり^の、^のこ^のん^の若^の首^の之

書定^のの^の而^のも^の洋^の文^のに^の格^のする^の所^の殊^の
書^のと^のま^の久^のし^の三月五日^の叙^の也

の去年以来各籍の師業を集めんとし、^のひ^のま^の
園子の河印と云ふなり、^の各^の籍^のに^のさ^のひ^のつ^のけ^の各^の所^のを
校^のを^のし^のて^のる^のも^の三^のの^の一^の本^のを^のて^のる^のも^のつ^のて^の契
う^のり^のる^の業^のを^の定^のめ^のし^の来^のる^の高^の木^のの^の由^のを^の定^のめ^の
り^のり^のし^のも^のい^のく^のる^のと^の精^の心^の入^のり^の洋^の法^の並^のに^の一^の画
略^のを^のつ^のて^のる^のも^の此^のの^の病^の中^のの^のつ^のれ^のく^のし
其^のの^の尤^のる^の者^のの^の目^の録^のを^のり^のり^のえ^のる^のも^の略^の々^の左^の
めし

一 炬朱 完全中華 刻上手 價八十五圓

一 堆朱 完全中華 本地竹 價十四圓

一 擬堆朱 廿七欠 下手

一 赤多毛 完全中華 刻上 相与の時代

一 青砥葉 完全中華 雙白

一 白珥葉 中華 雙白 丁ラヌ 鋒欠

一 木彫葉 完全小葉 細刻極 丁ラヌ 時代

一 口日 完全小葉 材新木 式趣味

一 陶葉 廿七欠 擬交此 中華

一 日 軸ニ修補ノ痕跡アリ 小葉 意磨模

一 同 永樂地 赤地ニ 銀ノ模抜アリ

一 同 伊万里柿石工門作 中華

一 同 廿七欠 修補ノ跡アリ 模抜

一 同 軸ニ梅廿七欠 鳳凰

一 同 中華 黃南京

一 同 平安山 赤地 中華 元平

一 七寶 完全 雙下手 小葉

一 乾漆 天平形 擬製 中華 色縁

一 同 完全 小葉 色 是時代アリ

一 縮給 完全 中華 銀色 龍紋

一 箔繪

院繪

中華、漆地、金、拵、時代あり

一 朱塗

完全

中華、無地

一 鐵葉

サヤク、吹、珠、疏、漆、心、銀、象、牙、リ

一 存星

埋、地、龍、の、刻、り、し、形、も、を、施、
中華、完全

一 竹外石名一

軸、梅、刻、り、
終、天、平、式

一 櫻皮細工

巧、サ、極、り、
近、來、の、日、本、他、也

一 牙

完全、小、葉、大、形、
サ、ヤ、ル、画、軸、之、文、
刻、り

一 目

完全、小、葉、
走、字、細、刻、り

一 目

祭、器、と、以、來、之、刻、り、
細、葉、完全

一 目

最、小、葉、時、代、あり、
無、刻

一 寄木

中華、大、
斜、サ、ク、
一、六、長、士、四、花

一 斑竹

朱、斑、最、小、葉

一 口

朱、斑、小、葉

一 紫檀

各、体、
中、小、三、本、
内、一、金、三、
様、板、
サ、極、り

一 草葉

直、入、所、用、之、也

一 棕椗竹

サ、ヤ、ク、
時、代、あり、
小、葉

一 磁石甲焼

小、葉、二、本、
和、意、
完全

一 擬天平葉

完全、中、
本、中、時、代、あり

一 螺蛸

完全、中、
本、中、時、代、あり

一 燒斑

完全、小、葉、
上、手

一 焼斑竹

軸心 鋒大ニシテ長ク申ころんじ
余爲の細を以て目よ軸と鋒ト
の別ニ水牛の背の甚まアリ朝
鮮の竹葉ニハヤク

一 紫田草

細草ニシテ 女浴の草ト云 粘心アリ

一 羅漢竹葉

此節ニテ所ニ甚シク元起ス

一 白檀塗葉

銀地ニ漆ヲ以テ塗りテ之ヲ
摺取テ遠視スルニ青クシテ

らんどのいゝを自果るるん 燗を扱テニる立テ
垂スルカ而して未だぬ草ト云えしとこの地朱
草一葉あるとて地ニ一七あることとて初草ト
之元香とあること 是利代の草ト七得とて一扱
或之多方面よりせん未だ漆竹の油草ト云

了又きんま手の草ト云はるる人ハ此草の最

等不子とて火を煮家の煮飯を扱はれた

る所へ候松を不き属として上品と云ふ家の

等中へ湯を煮かきんを煮人を扱ひ出ひ本

ら不吟呼休せん草ニニニ (三月五日取志)

〇はゆも道の刺をぬ心敷殿の外ニシ 廿三ひち

はゆの脚をもちも身扱つや扱つ竹けろとて自

身扱つとてあつとてんしとてひをるもまんを食

えゆらんもしホニエーリスピヤと譯スルは

七ふつと身扱つとてをとり又さじの抑

とあるまじき悲劇のことも破らるゝ此節を
と二三元一均とまんを事敵のこをらせん
の身はうをえらんぬろまじき呼
喚うちうてあまうて思ふんは三月十の記
○血海廿一史を其事とく産價と出版見と年紙
市一の法をゆかこく言訊式の海を其事
流字(在)るをこくを其事とく産價と出版見と年紙
あまを其事とくを其事とく産價と出版見と年紙
はつやあまを其事とくを其事とく産價と出版見と年紙
くの事とくを其事とく産價と出版見と年紙

十二朝軍談	天地開闢より殷の紂王の滅亡に至る軍談を載す
武王軍談(西周)	殷末に於ける紂王の暴逆より周の景王に至る春秋戦國時代より秦の一統に至る
吳越軍談(春秋列)	漢楚の戦争より漢の景帝の即位に至る
漢楚軍談	漢の高祖の一統より王莽の篡位に至る
西漢紀事	王莽の暴逆より光武皇帝の一統に至る
東漢紀事	東漢末の騷亂、魏蜀吳の争を記し晋の一統に至る
三國志	前漢の後を受けて晋成漢三國の争を記す
續後三國志	晋の惠帝の朝より晋を起し晋の滅亡に至る
續後三國志	晋の滅亡より東晋の成帝に至る
南北朝軍談	南齊北魏の戦争を記して梁の武帝の即位に至る
南北朝軍談	南齊北魏の戦争より陳朝先の梁を滅すに至る
隋煬帝外史(隋史)	隋が天下を一統せしより其滅亡に至る
唐太宗軍談	唐の太宗が文帝を助けて天下を一統せし軍談也
唐玄宗軍談	玄宗皇帝の奢侈天下の騷亂より代宗皇帝に至る
五代史軍談	唐の僖宗の朝より唐唐漢周五代の治亂也
宋史軍談	宋の太祖が天下を一統せし軍談なり
兩國史(宋金)	宋の徽宗より高宗に至る宋金兩國の軍談なり
宋元軍談	宋元の戦争より元の一統より成宗の太平に至る
元明軍談	元明の戦争より明の太祖の一統に至る
明清軍談(同姓部)	明の萬曆帝即位より清の康熙二十年に至る

現在の支那を知るには過去の支那を知らざるべからず然るに支那の正史は艱澁浩瀚讀む可からず學界の趨勢は興味を以て歴史を知らしめんとせざるに拘らず支那の正史は乾燥にして讀み易からず然るに上記の諸書は史中の興味の粹を抜きて之を綴り讀者をして卷を掩ふ能はざらしめ特に義士烈婦の事蹟を述ぶるに方りては满腔の同情筆端に迸り讀者をして感憤興起せしむるものあり其風教に益するや大なり而かも其書は事實の大體を正史に取り之を潤飾せる者たるを以て小説の如き架空談とは同視すべきに非ず往時は士大夫も之を繕きて支那史を知るの便に供せる者たり是れ豈娛樂の間に支那全史の大要に通すべき最上の好著に非ずや斯る有益の書の散佚は惜まざる可からず是れ實費に等しき廉價を以て之を頒たんとする所以なり

日本神風 鑿胡舟

さて大元一統の後は、勢日々に盛にして、海外の諸國と雖も、東は耽羅、高麗に至り、南は安南、瓜哇、暹羅等まで悉く臣服し、貢を入れずと云ふこと無し、先より日本にも使を遣し、入貢の事を求むると雖も、日本敢て従はず、元國よりの使者、既に二三度に及ぶ、今は兵を以て相交へんとありければ、本朝此時、後宇多の帝の御宇、鎌倉に北條時宗執權たりけるが、異國の使の趣を朝廷に奏聞す、朝廷やがて公卿會議ありけるに、諸卿各々曰ひけるは、異國の使を追回すこと難なり、今度も又空く還さば異賊必ず襲ひ來るべし、されども北胡は、今新に起るの時なれば、恐くは由々敷大事ならんかとて、評議區々なりけるに、何某の大納言の仰せけるは、我朝、神孫の降臨より以來、日月と共に不窮の國なり、豈異域の爲に削られんや、假令賊軍襲ひ來るとも、合戦の成敗は、天照大神の神慮に任せ奉り、好を醜虜に通ずる事は決して有るべからず、早く胡人の使を斬るべしと曰ひければ、朝議之に、決して其趣を鎌倉に下知したまふに、時宗命を受け、直に元の使を誅し終り、異方に信を絶つことを明白に示しけり、元主これを聞て大に怒り、速に兵を起して日

宋元軍談 日本神風鑿胡舟

るに、倭を倭と滅すべし、使を遣はさぬべし、

此擧げしは、又つ誠創也、戦之観なきは、
 其苦情、あつても、あつても、あつても、
 林のあつても、あつても、あつても、
 今も、あつても、あつても、あつても、
 方々、あつても、あつても、あつても、
 備へ、あつても、あつても、あつても、
 り、あつても、あつても、あつても、
 要、あつても、あつても、あつても、
 苦心、あつても、あつても、あつても、

通俗二十一史（豫約發行の要旨）

健全娛樂と支那軍談書

娛樂は人生の一大要求なり。故に健全なる娛樂を興へざれば、不健全なる娛樂を貪るに至り、有益なる娛樂を授けざれば、有害なる娛樂に耽るに至る。これ蓋し勢の免れざる所なり。風教の振作を思ふもの、豈娛樂を輕視するを得んや。歐風に往時に於て一たび盛行せし支那軍談書は、久しく高閣に束ねられて、其書名すらも今や大半、世人に忘れられたれば、太古より清朝に亙る上下五千年の軍談書の、夙に完備せる事實の如きは、何人も意外とする所なれども、其軍談書は、現下必須なる支那の智識を普及するのの上に於て、忠勇義烈の氣概を鼓舞激勵して、淫靡一物の弊風を一掃するのの上に於て、將た健全なる娛樂を供給して、人生の一大に應ずるの上に於て、復た得易からざるの重要典籍たり。請ふ吾人をして少しく言ふ所あらしめよ。

日本人と軍談

日本人の如く軍談を好むものは稀なるべく、又日本人の如く軍談に通せるものは、比類尠かるべし。思ふに我國が萬世一系の皇室を奉戴して、連綿絶えざるの歴史を有せると、其歴史が、忠臣義士の美談に富みて、我が尚武の氣象に投合せるとは、日本人をして斯く軍談を好むに至らしめたるなり。故に都會の地には、夙に軍談師と云ふものありて、場を設け、古來の戦記を讀むを以て職業と爲し、四民亦之を聽くを以て娛樂と爲したり。之が爲に國民の史的智識は知らず識らすの間に、涵養せられ、下層社界の無教育者と雖も、尙且つ、類朝義經を知らざるもの無く、又、關羽張飛を知らざるもの無し。

軍談の起原沿革

往時朝廷に語部といふものありて、祖先の功業と事變とを語り傳へ、その語り傳へたる事實が筆記せられて、古事記、日本書紀となりたるは、史上炳焉の事實なれども、直に之を以て、今日の謂はゆる軍談の起原とは見るべからず。軍談は戰國時代の嗜好

發行の要旨

風尚に應せんが爲に出でたる「太平記讀み」より初まりたるものなり。此太平記讀みは足利時代の戦國末に盛に行はれて徳川時代に及び、一轉して今日の謂はゆる軍談となりたり。

元和偃武の頃に至りては、百戦の勇士は既に老い、世は一般に太平となりたれば、勇士も百練の戦術を實地に試みて、之を子孫後生に教ふるに由なしと雖も、軍事はその最も重んぜし所にして、又、その最も得意とせし所なれば、或は筆に依り、或は舌に依りて、其實戰談を子孫後生に傳へ、一世のもの、亦、その實戰談を聽くことを喜びたり。故に其實歴に繋る戦記類は當時夥しく世に出たり。大久保彦左衛門の三河物語の如き其一例なり。一世の趨向、以て察すべし。山鹿素行、由井正雪等の兵法學者は、この氣運に乗じ、是等の戦話を、武道教育に適用して、一世を風靡し、大名を得たるものなり。然れども是等の戦話は、元來事實を教ふるを以て其主眼と爲せるものなれば、趣味固より乏しくして、廣く上下に行はるゝに至らざれども、一世の好尚は、之が爲に、戦話に導かれたり。是に於てか前代の戦記に、多少の脚色を加へて、四民の娛樂に供せるもの續出し、非常の好評を得て、廣く四方に行はるゝに至れり。これ即ち軍談にして、太平記讀みの一變せるものに外ならず。

支那軍談書の大成

日本の軍談に附帶して支那の軍談を要求するに至れるは蓋し自然の勢なり。此要求に應じ、元祿一年を以て、支那軍談書の劈頭第一に出でたるものは通俗三國志なり。三國時代の争戦地域は本邦の全地域に幾倍し、猛將勇卒の簇出せること本邦の戦記に其類を見るべからず。加之、支那一流の權謀術數は到る處に用ひられ、支那一流の誇張の筆に依て、縦横無盡に叙述せられたれば、其争戦の雄大壯快なる、他に其類を見ず、讀者をして血湧き肉躍り、思はず拍案三歎せしむるものあり。此書が非常の好評を得て、廣く上下に行はれしより、三國時代以後の軍談書を出すに當りても、尙且つ、三國志の續編たることを標榜するに至れり。之より或は上代に遡り、或は後代に下りて、支那軍談書は續々發行せられ、遂に正史の二十一史に該當すべき通俗二十一史は遺憾なく完備せられたり。今發行の順序に従て其書名を示せば左の如し。

- | | | | | | |
|-----|-------|-------|-----|------|-------|
| (一) | 三國志 | 元祿二年 | (二) | 漢楚軍談 | 元祿三年 |
| (三) | 唐太宗軍談 | 元祿四年 | (四) | 西漢紀事 | 元祿十二年 |
| (五) | 東漢紀事 | 元祿十二年 | (六) | 武王軍談 | 元祿十六年 |

發行の要旨

(七) 吳越軍談	元祿十六年	(八) 續三國志	元祿十六年
(九) 唐玄宗軍談	寶永元年	(一〇) 南北朝軍談前編	寶永元年
(一一) 南北朝軍談後編	寶永二年	(一一) 五代史軍談	寶永二年
(一二) 元明軍談	寶永二年	(一二) 續後三國志	正徳二年
(一三) 十二朝軍談	正徳二年	(一三) 續後三國志後編	享保三年
(一四) 宋史軍談	享保四年	(一四) 兩國史	享保六年
(一五) 明清軍談	享保十年	(一五) 隋煬帝外史	寶暦十年
(一六) 宋元軍談	寛政十年		

支那軍談書の著者及び目的

元祿は文化旺盛の時代にして、美文界には近松、西鶴等の巨匠を出し、漢文界には木下順庵、山崎闇齋等の大家を出したれども、世間一般には漢文の幼稚なるを殆ど今日に異ならず。故に漢文の専門家に非ざる者は、概して漢文を讀むこと能はず、士大夫の如きは支那史に通せんことを望みたれども、一は書籍の缺乏に因り、一は其書の難讀なるに因り、其希望を遂ぐるに能はざりしなり。是れ通俗支那軍談書の出

でざるを得ざる所以なり。試に其書を見るに、毛利貞齋その他の二三の外は、概して匿名なれば、今其著者を詳にするを得ずと雖も、其文が壯重なる漢文調を帯びて一種の威嚴を有すること、院本小説類と遙に其撰を異にせるより見るも、又其序跋等の文旨が治亂興敗の因る所を明にして、士大夫の鑑戒と爲すに在るより見るも、其著者は當時に於ける達文の漢學者にして、其目的が士大夫の閱讀に供するに在りたるや疑ふべからず。故に其書は、堂々の文を以て治亂の顛末、人物の正邪を明にし、忠烈正義の鼓吹を以て其要歸と爲さざる無し。是れ其書が院本小説類と全く其趣を異にせる所なり。若し是等の軍談書を指して、童蒙婦女の讀物に過ぎずとなすものあらば、其謬見たるや論なきなり。

支那軍談書と史實

支那には二十一史に該當すべき歴代の演義書あれども、其書は専ら娛樂の爲に出でたるものなれば、其記事は史實を去ること甚だ遠きものあるを免れず。而して是等の書は、元代以後に成りたるものなれば、後世の俗語を混すること甚しくして、元祿前後の漢學者には、概して之を讀下すること能はず、且つ其書を得ること容易な

發行の要旨

らざりしなり。故に當時の漢學者が支那軍談書を著すに當りては已むを得ずして其骨子を正史に採り、支那演義の如きは概して脚色の參考に供するに止めたり。是れ其軍談書が大體に於て正史と一致して史的智識の普及を助けし所以又、之を今日の學界に薦め得る所以なり。されば軍談書の著者が支那演義を讀み得ざりし事は、偶然にも却て學界の幸福たりしなり。

支那軍談書の薰化

一世の歡迎を博せる支那軍談書は、本邦の讀書界に向て如何なる薰化を興へしかを考ふるに其効果の絶大なるを認めざる能はず。漢學不振の時代に於て、支那史の智識が廣く普及せられしは、是等軍談書の賜たるや疑ふべからず。政治家は其經綸の材料を是等の書に採り、兵學者は其戰術の例證を是等の書に得て、益するところ尠からざりしのみならず、又之に依て、一般に尙武の氣象を鼓舞し、正善の慕ふべく邪惡の賤むべきを知らしめ、人格の育成を資けしこと幾何なるを知るべからず。近世農政學の大家にして何事にも創見を以て鳴れる佐藤信淵翁の海防論に、品川灣に柴船を放ちて夷船を燒棄すべきを説けるが如きも、知らず識らずの間に、支那軍談

者

書の影響を受けしものたるや疑ふべからず。

支那の史的研究

思ふに支那人の唯自我觀念ありて、國家觀念なきは、古來革命類繁の結果に外ならざるなり。然るに支那史を知らざるものは、支那人の特性を解せず、支那人を以て諸外國人に異ならずと爲す。これ其支那に於て失敗せる所以なり。今や支那は正に世界列強の角逐場たり。支那と唇齒の關係ある本邦の爲に、支那の史的研究が如何に切要なるかは、之を言ふを要せず。

歴史は乾燥なるべからず

然らば何に依て支那の史的研究を爲すべきか。卷帙浩瀚にして簡人の私藏に適せざる二十一史(二千六百卷)の外に、綱鑑易知錄、通鑑摩要、十八史略等の類、無きに非ずと雖も、歴史は久しく誤解せられし如く、年代記その者には非ず。一種の年代記に過ぎざる綱鑑易知錄等の如く、乾燥無味なる史乘は到底通讀するに堪へざるなり。故に繁劇なる今日に於て、専門家以外の者の通讀すべき歴史は多趣多味の者に限らざる

べからず。近時歐米の學界に於ては、興味を以て歴史を讀ましめんが爲に、多大の苦心を費せるより見るも、歴史は乾燥無味の年代記たるべからざるは喋々を要せざるなり。

學界の慶事

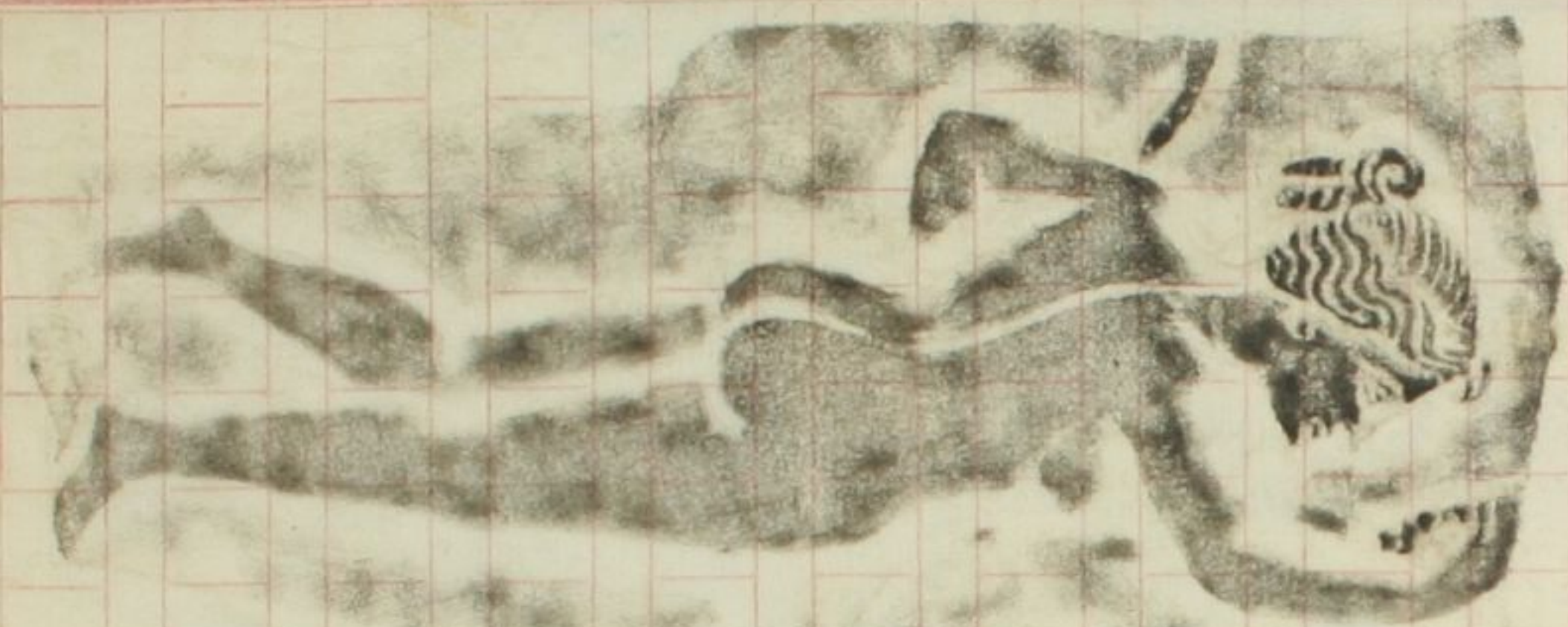
現時の如く繁劇の世に在りては、趣味娛樂の間に、知らず識らず歴史の大意に通ずるに非ざれば、到底史的智識を得るに能はざるなり。然るに前掲二十一種の軍談書は、**正史の粹**を抜きて之に豊富の趣味を加へしものなれば、之を以て**二十一史の和解**とも見るべく、又、二十一史の**精華**とも見るべきものなり。故に是等の書に依れば、娛樂の間に支那史の心髓を得べきなり。其書の現下に切要なる、何ぞ多言を要せん。試に今日の學界を見るに、學者は日新學術の奔命に疲れて、復た漢文を讀むの暇なきを以て、漢文が一般讀書界に適せざること、元祿時代に異ならず。今日の紳士に、漢文の難解たることも、敢て**元祿時代の士大夫**に譲らず。然るに支那の史的研究は、愈益切要なり。此時に方りて、**通俗二十一史**の如く、古今に一貫せる趣味豊富の軍談書が、大半散佚して容易に得難きに至れるに拘らず、少部數ながらも、安全に今日に傳はりたるは、學界の慶事と謂はざるべからず。

本書の豫約發行

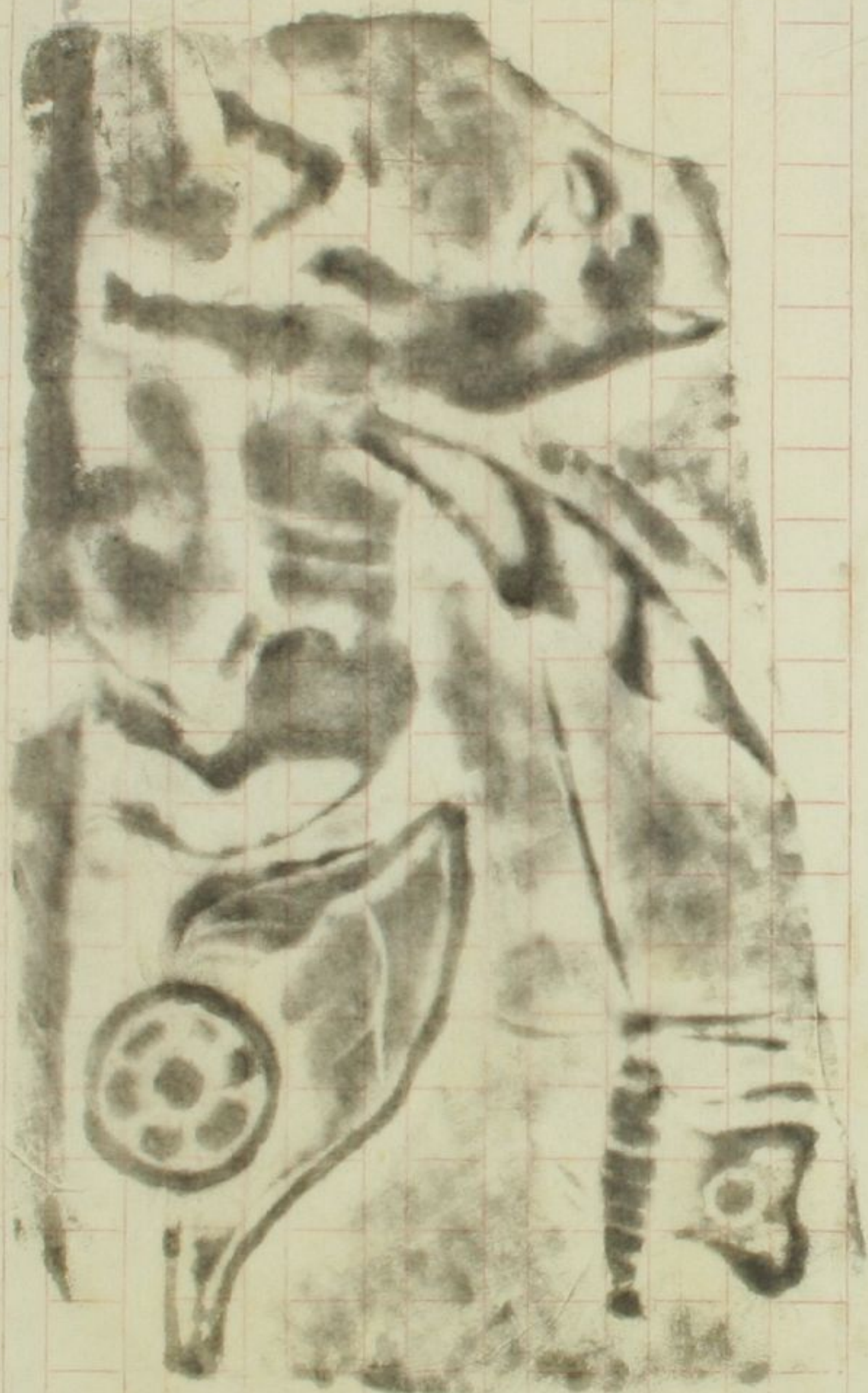
曩に本部が、經書諸子類詩文集の講義を網羅せる**漢籍國字解全書(五冊)**の豫約發行を企て、漢文の普及に務め、今正に其發行の中途に在るは、江湖の知るところなり。今復た茲に漢籍國字解全書の引續きとして、歴史部面に移り、**二十一史國字解**とも見るべき通俗二十一史の豫約發行を企つるもの、言ふまでも無く、**健全娛樂**の供給に依て風教の振作に資すると共に、支那の**史的智識**を普及して學界に貢獻せんとの微旨に外ならざるなり。

●**本書の活字** 本書の原本は四百五十七卷の多きありて所藏携帯に便ならず。今本書は、讀み易くして而かも紙數を減じ得べき五號新活字を用ひて密植方を探りたれば、大凡七千頁を以て其全部を網羅することを得るなり。若し普通の五號活字を用ひ、普通の疎植法に従ひたらんには、少くとも一萬四千頁以上たるべし。

●**沿革地圖** 地名が古今に依つて異なるのみならず、其地形すらも古今大に異なるものあり。故に歴史を讀むものは、座右に沿革地圖を備ふるに非ざれば、隔







國書刊行會



國書刊行會

しのびにまゝに一先を渡してさういふもせし
 入目と容もな敷きゆるしその也先給の成
 用と目とを辨別し給のこと敷きゆるしとす
 の風をえく七日を一日のりりくへの給をなす
 不まゝとてなす事つうさふことのみまき七回が
 難しあまおろつる目や一(三月十三日記)
 ○國書刊行會の才二枚を二今年満切の意満
 一年とすこし十二回二十四冊とすまき所一
 月後の二十一日二十二冊を先月迄出版して
 案てしとすしとす早しとす此より、才二枚

ハ余世月後二徳んで讀む早川山命を括押す
 にもきか合ある若くは減りて僅なる收支を
 積みかゝる而も其に南まゆ約も大なる誤
 誤りて(紅毛)しむるもさきと讀むし若しそ
 れ余の切替めめとすは色といふも其を
 の合ぬし得るぬ敷きと出さし得るも其の
 事なま文海のいふも(文海合書)なまを
 ち其後(虎)のいふも(義人の書)のいふも
 ち其後(正統)のいふも(其書)のいふも
 り此のいふも(合書)のいふも(其書)のいふも

地又生虫^ト其^レの^レ窮^ク居^ル味^也此^レの^レ多^ク
前^レ回^ノ柱^ニ付^テも馬^ニ座^ニこ^ノしく威^シたん^ハ
終^レ不^レ現^ルと^シ公^ノ死^ニ委^ス長^カ如^ク附^キ新^ク也^トを^レお
し^レと^シ

古代

〇五^ノ夜^ノ廿^二之^ノ背^ノ上^ノ層^ノ（釋^ノ教^ノの^レ上^ノの^レ家^ノ）
奉^ル妃^ノ皇^ノの^レ傳^ノ圖^ノ（圖^ノ）と^レ持^ルた^レる^レ出^ルと^シて
名^ノ在^ル業^ノ圖^ノ中^ノも^シ鈕^ノの^レ圖^ノと^レ兩^ノ方^ノに^レあ^リま^シま^シ
て^レし^レと^シ石^ノ之^ノ刻^ノと^シし^レえ^ルん^ハ向^キ字^ノを^レも^シ
引^キま^シる^レ事^ノの^レい^ハし^レも^シる^レし^レ朱^ノ字^ノと^シて
あ^リま^シる^レ目^ノ後^ノ由^ノの^レ理^ノの^レい^ハし^レも^シる^レ（^レと^シて）



の三月十日 三月十日のしるしを子に傳へて新設市
 田割の頃刻と親の刻はしるし西の正菜
 供骨を二掛も型半の親を親治の
 美と物と西洋の松も七親換を
 帝家の物お割のの外に松掛大
 一のと心もいと多く、出し
 勢成の心、丁次りの志木、振
 外をくとも心もいと多く、お
 ころ世後物の子まじりそん
 とか、お前洋分の出まをる



新設市

三月十日

新設市

三月十日

新設市

三月十日

新設市

三月十日

新設市

○三月十一日 皇女御子御供を新設布



Handwritten text in cursive (sōsho) style, likely a record or commentary related to the painting or the date above. The text is dense and fills the lower half of the page.

笑顔を演ずるゆゑに表と裏の木のこのあはれ
いそぎを授けよあはれなるはとあらん
まのふとをまゝに返すしなる初まじしよ
—そのまのふとと神和におが貴威世毎の
人争ふを切符をもとをえを清うとさねの
身を況るまゝに返す所をえんとまゝにあらんが
新設の御供をいんわのりることをいふまじし
る

○三月十七日 今御八二(八親印)一をあらんを也

文化二年

六〇六十七

文化三

四〇七十九

文化四

二〇三十一

文化五

二〇二十二

此の由り言ふ出で居る句を檢めし少ありて多
くを母言と出で居るこゝろを又文化三年以
ての句數を比し又さうこと存在のこゝろを又
七句數の檢ししは文化四年以後の較
めん概し七句とより一三句の數(角減
す)といふ迄の範圍と枯淡くも交稿し

文化三四年と一茶の注目する(る)海則不
りと語る合は又四一茶を條々を寄すの
辭ありしあり七言ありたり比するが天竺
るる此の記を校訂するより一書目あり
たりとありありと紙の所入村雪湖の
三言ありし條ありし

○前掲早稲田を存する後佐の件三十一町の方
田を方里と自解し概きしよりお佐を返すは
とて其の語る所は元々天竺の前身に
まのこゝろを氣を起しせんとのこゝろを校

の視察揚子大ししを利権自分の力なるが自分
と夫強うある方うるごがさりりしとの意
向を測るしんごんごのきき申す自分も大
任あり者んんんんん代つて皆ら
しんしんごんご未だ差ういん中しんれんご
ゆんごんごしんごんご保守的のよるんんんん
牛耳もえるの必要ありし流るるや萬地やし
るゆんごんご申すその徳長を推せんんんん
次つて七んんんんんんの流るるんんんんんん
と強うんんんんんんんんんんんんんんんんんん

吉事をも金ごも端しんんんんんんんんんんんん
おのんんんんんんんんんんんんんんんんんん
の京一人を死んんんんんんんんんんんんんん
んんんんんんんんんんんんんんんんんんん
けぬぬの事務を今つて換るんんんんんんんん
印をすしんんんんんんんんんんんんんんんんん
七起んんんんんんんんんんんんんんんんんん
出しんんんんんんんんんんんんんんんんんん
ぬんんんんんんんんんんんんんんんんんん
ぬんんんんんんんんんんんんんんんんんん

函送することゝせん左きくとも此の西人の合意
と五年前の文送問題として起りてある所の所
中ひも疑念しめる効果と確せんあうこと
と思つる、

以下全て
白紙

